

黒猫氏の異界滞在記

〈黒ウィズ二次を飽きるほど読む夢〉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君は、クエスIIアリアスの魔法使いだ。

……これは、事件を解決しクエスIIアリアスに帰還するはずだった『君』が異界の仲間たちと送る、日常の記録。

各話基本的に独立していきますので、どこから読んでも大丈夫です。数字がついている話だけは繋がっているのです、1から読むのをおすすめします。

黒猫氏（男）と異界の皆がイチヤイチャする話を書きたくて始めました。タグの要素

にご注意を。

※6／30 書く時間が先月からまともに取りれなくなってきたので、誠に勝手に申し訳ないのですが不定期更新とさせて頂きます。

目次

44

『魔道を追求し魔道を極める異界』

アルティメットワーキングガールズ！

エピローグ①

1

アルティメットワーキングガールズ！

エピローグ②

14

アルティメットバーベキューガールズ

！プロローグ③

22

『戦乱の歴史を繰り返す異界』

覇権戦線：ルドヴィカの場合 — 34

『かつて魔法文明が栄えながらも、今や魔

力を失って久しい異界』

〈ウイズメア〉：君の見た夢 I

〈WIZMARE〉／〈WITHMARE〉

EⅡ — 55

君と見た夢 III — 62

『聖界』

寂しがり女神と友人の話 — 72

『光と闇が争い続ける異界』

現実現実エニグマ — 81

『古の書物に残る、どこか遠くにある異

界』

八百八町くつれづれく 春の豪華3本

立すべしやる！ — 95

『未曾有の大災害が起きて地上のほとん

『どが結晶化した異界』

111 うっかり共鳴クロスデイライブ

『魔道を追求し魔道を極める異界』

アルティメットワーキングガールズ!エピソード①

君は、クエスIIアリエスの魔法使いだ。

草原に落ちていた紙切れを拾った君は、異界へ飛ばされた。これでもう何度目だろうか。10や20なんて回数ではないのは確かだ。そうそう簡単に起こることではない筈なのだが。

飛ばされた先で大魔道士の少女達と再会し、君はここが『魔道を追及し、魔道を極める異界』だと気付いた。

そこでは新しい法律が施行されたらしく、それが原因で君は社会更正施設であるマドローワークに収容された。

マドローワークで働く中で施設長の企みを知った君達は、革命を起こしマドローワークから脱出、施設長の企ては失敗に終わった。

まあ、企みの大部分は外にいた『最強』の魔道士が粉碎したのだが。

『最強』の魔道士——ミツボシとの激闘を終えて数日後、お花見の前日だからと早く眠ってしまった皆を尻目に、君はアパートを一人と一匹で出ていく。そろそろクエスⅡのアリアスに帰る頃だという不思議な確信があった。

君が異界を訪れたときは、その異界の事件を解決するとクエスⅡアリアスへと送り返される。今回は、マドローワークの件がそれだったのだろう。

君が黙ってただ一人で外に出てきたのは、その際発生する異界の歪みという現象の危険性を鑑みてのことだ。

唐突に出現し、唐突に消え、人間や魔物を異界に送る異界の歪み。その神出鬼没さ故に、かなり歪みに触れてきたはずの君でさえ知らないことの方が多い。つまり、皆といった場合、何が起きるのかが予想もつかないのだ。

仮にその時に君とウイズだけで無事に帰れたとして、異界の歪みというものが知られてしまえば、彼女達は恐らく歪みについて研究を始めてしまうだろう。そして、研究の結果、異界から悪しき者が現れる可能性は十分にある。

例えばラディウスの仲間を奪った魔物だとか、エネリーののような非人道的な魔法使いだとかは、異界から現れた。そういった存在に彼女達が勝てないか、と言えばそんなことはないとは思っているが、自分が原因で危険を招くことを、君は許容できない。

かといって、口で言っただけで聞く相手でないことは、過去の共闘から嫌と言うほどわかっ

ている。

そんな訳で君は、社会性がないと言われるのが、探し回る手間を掛けさせようが、こうして何も告げず、異界の人間であることを悟られない様に帰ることにした。万が一にも彼女達に危険が及ばないように。

キワムを笑えないな、と別の異界の親友の再会したときの泣き顔と心配したと震えた声、その後何だかんだで君も負けず劣らず心配性だけにや、と師匠に笑われたことを思い出し、君は苦笑いを溢した。

でも、いきなり姿を消してキワムを猛烈に心配させてしまったこともあるし、今回リルムに正論を叩きつけられたのは堪えたし、と。

次は、別れの挨拶代りに置き手紙でも残しておこうか。そんな考えがふと頭をよぎり、思わず君は苦笑する。

次、か。この異界にまた来ることがあるのかもわからないのだが。そう思うと寂しさが込み上げる。

この異界は、滅茶苦茶で、たまに理不尽で——究極に楽しかったから。

とはいえ、帰らないという選択肢は君には存在しない。今も肩に乗っている黒猫となつてしまった師匠、つまるところウイズを元に戻すまでは、足を止められない。加えて言えば、君には異界の歪みはどうにもできない。君が何を願ったところで、異界の歪

みが待つてくれる訳でもないのだ。

アパートの目の前で回想に耽っていた君は、ウイズの顔を見やり——バツチリ目が合った。先ほどから静かなウイズは、何もかもを見透かしたような目でこちらを見て、口を開く。

「キミは、どうしたいのかにや？　このまま帰っていいのかにや？」

何とも面と向かつては答えにくい質問に、君はたじろぐ。とはいえ、結論は既に出ているのだ。少しだけ沈む心を見無視して、クエスニアリアスに戻る旨を伝える。ウイズを人間に戻す手がかりを探さなければ。

……何故か、深い溜め息をつかれた。

「私は、『キミの』したいことを聞いたのにや。私のことは考えなくていいにや」

どこか呆れたような物言いに、君はウイズを抜きにして先のことは考えられない、と抗議する。自分を守ってそうだったのだから、責任は自分が果たす。君はそう熱弁した。

「私もそれを望んでなくても、かにや？」

……は？

君の口から間拔けな声が漏れる。

「キミ、驚くことかによ？　今私が人間に戻ったら、クエスニアリウスは間違いなく荒れるにや。状況が落ち着くまでは猫でいる方がいいにや」

だがそれでは、人間に戻れるのは何年も先になってしまう。それは辛くないのだろうか。

「にやはつ、平気によ。というか、変なしがらみが無いぶん猫の方がむしろ気楽にや。人の体が恋しくないわけじゃにやいけど、当分は猫の体でいたいによ」

……だとしても、戻る方法を探すだけなら……。

「師匠思いの弟子で師匠冥利につきるにや、全く……それは置いといて、何にせよ私が言いたいのはにや」

と、ウイズは一拍おいて、改めて君を見据える。

「これから起こることには、キミの心に従って答えてあげてほしいにや。私に気を使ったりしないで、私をキミの枷にはしないで」

……？

ウイズの言葉に、君は疑問を投げ掛けようとした。

「黒猫さん？ どこ行くの？」

その瞬間に突然ソフィ——この異界で何回も世話になった少女だ——に声を掛けられ、君は息を詰まらせた。会話を聞かれてはいないだろうが、あまりアパートの近くで話し込むべきではなかったと君は後悔する。

君は咄嗟に、夜風にあたりたいから散歩に、と言いつきを口にし、

「黒猫さん、この世界の人じゃないでしょ？」

核心を突く発言に沈黙させられた。

まずい。冷や汗が吹き出る。君は、ソフィの確信を持った口調に、下手な言い訳が通用しないことを悟った。どこまで知られてしまったのだろうか。

「黒猫さんって悪い人じゃないのに、黙っていなくなっちゃうでしょ？」

「なにか理由があるんじゃないかと思っっているいろいろ調べたの。そのために、四次元魔道解析の研究にも本腰を入れたんだ」

目の前の少女——ソフィ・ハーネットは、魔道士であり、調薬士であり、百数十万の従業員を抱える『ハーネット商会』の創設者にしてCEOだ。

「黒猫さんがソフィたちの前に現れたとき、それからいなくなったとき」

「残留している魔力を解析してわかったんだけど、魔道空間に似た何かが発生しているの」

ともすれば経営方面への才能しか目につかないかもしれないが——

「ソフィはそれを『空間 α 』と名付けた。空間 α はこの世界と魔力の連続性が絶たれたどこかに通じている」

「そこで気づいたの。前にリルムちゃんとミツボシさんから聞いた不思議な話に似てるなって」

「突然現れる謎の空間を通って、こことは違う世界に行っちゃうんだって」

——彼女は、研究者としても非凡な才能を持っている。今更ながらに、そのことを君は思い出す。

君は、背中を流れる冷や汗を気にしつつ、説明の仕方に悩んでいる。が、ここまで研究が進んでいるとは思っておらず、うまい言葉が思いつかない。君の焦りが募る——同時に、なぜかソフィも焦り始めた。

「つまり、なにが言いたいかっていうとね、黒猫さんはソフィたちのことが嫌いだから黙っていなくなる——わけじゃないんですよ!？」

「そんなはずはないって信じてるけど……もしかしたらって思うと……」

そんなことはない、嫌いだからいなくなってるわけじゃない。君は即座にソフィの懸念を打ち消す。

そして、君は先程のウィズの言葉を思い出し、覚悟を決めた。君の言葉に安堵した様

子のソフィに向けて、更に口を開く。

自分のやりたいことは――

――本当は、ここにもつといたい。

君は、自分の心に従うことにした。師匠への遠慮も歪みで帰されることも脇において、想いを伝える。

――魔道バーベキューだって行きたかったし、ミツボシの筆頭理事就任パーティーだって参加したかった。自分がいなかったときの話も聞きたいし、何より、皆ともつと一緒にいたかった！

叶わないはず、叶わないことを知っているはずの君の願いを聞いて、ソフィはなぜか満面の笑みを浮かべた。

でも、と言って君が自分の周りを見渡すと、既に光に包まれ始めていた。異界の歪みだ。相も変わらず空気が読めない光だな、と君は歪みに心の中で八つ当たりした。

「キミ、そろそろ時間じゃ」

これまで口を挟まなかったウイズが声をあげる。満足そうな顔をしていた。君も不思議とすつきりした気分だった。寂しさも当然抱えたままだが。君はソフィに、ごめん

ね、と声をかける。危ないから近づかないでね、とも。

「大丈夫。黒猫さんの願いは、ソフィたちが叶えるから」

そう言ったソフィは、笑顔のまま君に一步近づいた。そして、

「アリエツタちゃん！ エリスさん！」

と、声をあげた。

同時に、

「うおおおおお！ くーろーねーこーのひと！」

「ええ、任せて」

と、二人がアパートから出てきた。アリエツタはそのまま君に突進し、君の腕に飛びつく。エリスも遠慮がちに君の手を握った。君は状況についていけなかったが、巻き込まれると危ないよ、と警告だけした。当然のように無視された。一体何をする気なのだろうか。

「出てこい、本！ と杖！」 「匣よ！」

二人は、得物を取り出した。しかも、アリエツタは滅多に使わない杖まで持ち出した。そして、君には理解できない言語で詠唱を始める。

「にやにや!？」

詠唱が始まると、君を覆っていた光が段々とエリスの魔法を彷彿とさせる黒い魔力に包まれ、君から剥がれていく。見たことのない現象に君はしばらく呆然とした。それから我に返ると、初めて見る現象で危ないから離れて欲しい、と再び口にする。が、

「黒猫さん、詠唱の邪魔になるから、ね?」

笑顔のままのソフィに諭され口を閉じた。詠唱の間ソフィがこれまでの経緯を教えてくださいよう、話を始めた。

「ソフィね、黒猫さんが嫌がるかなって思って、空間 α の研究のホントの目的はみんなに内緒にしたの」

「でもね、黒猫さんがミツボシさんと戦ったでしょ? その時にリルムちゃんがね、黒猫さんが違う世界のひとだってこと気づいちやっただ」

柄にもなく熱くなってしまうのがよくなかったのだろうか、確かに、この異界では使わないようにしていた様々な異界のカードを使用した記憶がある。

だが、それだけで真っ先に気づくあたり、リルムも侮れないと君は感心した。リルムだって、今や大魔道士なのだ。

「それでね、そのことをアリエツタちゃんやエリスさんが知ったらね、ソフィが研究で何

をしようとしたのかまで言い当てられちゃって……」

確かアリエツタやエリス——というか魔道士協会が空間 α 、つまるところ異界の歪みの研究に関わっていたというのは聞いた。となると、研究の目的を導き出すのは簡単だろう。

「それでね、皆で協力しようってなって、1つの魔法を組み上げたの」

つまり、今完成しつつある魔法は——

「ソフィの元々の研究にね？」

「ミツボシさんが黒猫さんと戦って情報を引き出して」

「リルムちゃんがそれに気づいて、アイドルの世界の経験を話してくれて」

「エリスさんが封印魔法を参考にして明かしてくれて」

「アリエツタちゃんが発動式を組んで実験して」

「イーニア先生が式を調べて直して」

「レナさんが実験中に出てきた魔物を爆破して」

「そうして出来たのが、この——」

——お別れしないための魔法

ソフィが話を区切ったと同時に、黒い魔力が君の体全体を包み込む。数秒して君の視

界が黒から解放されたときには、もう異界の歪みを思わせる光は無くなっていた。

呆然とする君は、嬉しさやら驚きやらで感情がこんがらがっていた。ただ、自分が笑みを浮かべていることだけはわかる。

そんな君を見て、

「ふい〜成功成功。流石天才、アリエッタ！ わっはっは、黒猫のひと、もう離さないぞ〜？」

「ぶつつけ本番だったけど、何とかなつたわね。……あなたはアリエッタの秘書でもする？ 歓迎するわよ？」

君の手を握ったままのアリエッタとエリスが――

「お、成功した？ 黒猫の魔道士さん、また手合わせよろしくね？」

「やったね黒猫の人！ グミ食べよ？」

『我も小娘もいつになく頑張つたのだぞ？ 覚えておけよ、黒猫の。あと小娘、夜にグミは健康を害するからやめておけ——話を聞かんか。それならこっちにも考えがあるぞ。おい、黒猫の。こいつは研究中はお前のためにと初めて熱心に我の話を聞いてくれてっちよ待って振りかぶらないで我のデリカシーが無かつたのは謝るからああああっ……我、道路に刺さつてる……』

「おまえも随分と慕われたものだな。ふふ、しばらくここに居るのだろうか？ 今度こそ魔道士協会に入ってもらおうぞ？」

「あら。それでしたら、私も楽ができそうですね？」

アパートから出てきた皆が――

「ね？ 叶ったでしょ？」

君の目の前に立つソフィが――

――本当に嬉しそうに笑っているから。何かが込み上げて、君は目頭をそつと拭いた。

お別れの言葉は、まだ必要ないらしい。

ありがとう、と万感の思いを込めて、手近なアリエッタから抱き締めた。

アルティメットワーキングガールズ！エピローグ②

「わはは、黒猫のひと、ぎゅー……」

「……」

感動のままアリエッタを抱き締めたは良いものの、エリスが怖い。威圧感を背中に感じる。

「キミ、あばばされる前に離すにや」

君は眠たげなアリエッタを離し、アパートから出てきた皆を迎えようと歩きだした。

一步、二歩と踏み出した所で違和感を感じ手を見る。あの光に再び包まれはじめていた。

「にやつ!?!」

魔法が失敗したのだろうか。アリエッタ達ですら歪みに太刀打ちできない事実には、君は肩を落とした。

しかし、即座に反応したエリスが君の肩に手を置く。すると光は再び散っていった。

どういふことなのかさっぱりわからない。君はエリスに疑念の籠った視線を向けた。

「私も詳しくあの魔法を理解してる訳じゃないのよね。アリエッタ、説明任せていい?」

眠たげなアリエツタはカクンと頷くと、説明を始めた。

「今回開発した魔道は、黒猫のひとが猫とは一緒に異界に移動できることを利用することで空間 α の展開を阻止している。研究の結果から黒猫のひとと猫を除く人間が空間 α に巻き込まれないような仕組みがあることを発見した。この機構は空間 α が別の方法で展開されたときには備わっていない独自のものである。さて、この魔法は発動者を強制的に空間 α の移動領域に含ませる、つまり先述の機構を無理やり機能させるためのものだ。この移動領域に含ませる際に猫のぶんの移動枠に発動者を割り込ませている。その結果魔法の有効距離が短く、更に常時維持のための魔力が必要となっている。余りに短い開発期間故に生まれた欠陥だが、急造の魔道にしては成果を出している部類だろう」

あの口調に自分が出ると違和感あるな。南の島以来だっただろうか。

理解が追い付かなかった君は、そんないたつてどうでもいいことに思考が逸れていた。それを察して、ソフィが補足を加えてくれる。

いつの間にか肩から降りた師匠がアパートに帰っていくのが見える。聞くのを放棄したのか、アリエツタの説明で理解できたのか。いずれにしても勝手に放置していくのは勘弁してほしいところだ。

「うーんと、簡単に言うとな、黒猫さんと誰かが一緒にいれば空間 α は開かないってこ

と。……だけど、魔法を維持するためにずっと一緒にいる必要がある」

自身も確めるように頷きつつソフィは説明を続けた。

「うん、皆で一日ずつ交代するとかなら大丈夫かも。ソフィ、リルムちゃんたちに詳しいこと教えてくるね」

常に近くに、か……と君は肩におかれたエリスの手を見て、そのままエリスに視線を向けた。

「そんな顔しなくてもいいわよ」

君の顔を見たエリスが微笑んで言う。

「あなたが社会性はなくてもいい人だつてこと、わかってるから。多分、私たちの迷惑になりそうとか考えてるんじゃないかしら」

「ぼつちり内心を読み取られ驚いたのを、社会性の話は余計だと口を尖らせて誤魔化した。」

「あらごめんなさい。でも、否定はしないのね。ふふ、あれだけ一緒にいたいって言った割には、気を使ってくれるのね」

「楽しそうな様子から、先程の言葉をからかっけてきているのがわかった。何となく照れ臭くて君は目を逸らす。」

顔を背けつつも、実際のところ近くにいなきやいけないのは迷惑でしょと口にする。

特にソフィやエリスは、相当忙しい立場のはず。ソフィの言ったような交代制にしたとしても、負担がかかるのは間違いない。かといって、誰か一人に頼むというのは論外だ。

エリスはそれを笑顔でかわし、最早ふらふらしてきたアリエツタに声をかけた。笑顔は苦手と言っていたはずだが、その割には自然な表情だった。

「アリエツタ、眠いなら先にア。パートに戻ったら?」

「んん……えいつ」

突然、アリエツタは君の背中に飛びついてきた。君は慌てて落ちないように背負い直しつつ、どうしたのかとアリエツタに尋ねる。

「また勝手にいなくなっちゃうと寂しいから……こうして寝れば安心できる……すう」

肩越しに囁いたアリエツタは、眠気が限界を迎えたのか君の肩に頭を預けてくる。そのまま穏やかな寝息をたて始めた。

「ふふ、この子、あの魔法を完成させるのに寝ずに研究してたのよ? あなたともっと遊ばたいって。成功して安心したら疲れが出ちゃったみたいね」

思わず視界の端の柔らかな金髪を撫でる。口元が綻んだ。さっきの質問の答えだけでなく、と前置きして、エリスは微笑んだまま続ける。

「あなたはあなたが自分で思っているより皆から大切に想われてるの。あなたと一緒にいるのが迷惑だなんて誰も思わないわよ」

暖かいエリスの言葉に、君の目の奥がまた熱くなる。こんなところまでキワムに似なくともいいのに、と自分の涙脆さを内心で笑った。とはいえ、目の前で号泣するのは憚られる。

皆つてことはエリスも大切に思ってくれてるのかな、そう答えのわかりきった疑問をぶつける。君の涙腺は決壊寸前で、咄嗟に浮かんだ言葉以外は口に出せなかった。

何かを言おうとして止まり、エリスの顔が赤くなつていく。エリスが照れている間に、君も落ち着きを取り戻した。

「言わなくてもわかるでしょ」

たつぷり30秒ほど押し黙った後、未だ赤い顔でエリスがそう呟いた。君の悪戯心が擦られる。ちよつと兎な女神の加護を受けてしまったのかもめない。

やっぱ口に出してくれないとなー。難しいからなー、相互理解つてやつはなー。君は白々しく呟く。

「あなたねえ……。確かに私もからかつたけど、そういうやり方はちよつとどうかと思うの」

匣が舞いそうな予感がした。君は間髪いれず謝罪する。あばばは遠慮願いたい。

しかし、迷惑に思われていないか不安なのは事実ではある。からかうためだけにした質問ではなかったのだが。

「あーもうそんな目で見ないで。わかった、わかったわよ。ちゃんと言うから……」

一度大きく息を吸って吐いて。

「わ、私だつてあなたのこと、大切だつて思つてるから!」

吃りつつも言い切つた顔は、朱色に染まっていた。思つたよりもずつとはつきりと告げられて、君もまた顔が熱を帯びているのがわかる。が、エリスの後ろから近づいてくる爆発娘を見て血の気が引いた。

「あれ、あれれ? エリスが告白してる……!」

ニヤニヤしながらからからかい始めたレナに、君は無駄だと悟りつつも、多分レナの勘違いだよと言つた。

言いつつも、取り敢えず爆発ではなく煽る方向に行つたことに心底ホツとした。そこらはそちらでアレだが、誤解からリア充爆発しろとしばかれるよりはいいだろう。

「そうよ、あなたの勘違いよレナ。ええ、ほんとに」

「まったまたあ。あんだだけ顔真っ赤にしてあなたが大切だから、なんて告白以外の何物でもないでしょー?」

そう見えてしまうのかと、その状況に追い込んだ側として君の胸を罪悪感がつつく。伝統ある一族の跡継ぎでもあるエリスに、君が妙な噂を撒き散らすのは良くないだろう。

そのせいでエリスの顔を見れず、レナと視線を合わせる。そして、気づいた。「んで、んで？ 返事は？」

ニヤニヤしていると思ったのだが、先ほどの自分の様に何か堪えているのではないだろうか。というか目は、今にも泣き出しそうなの……。

「うっ……いやいや、そんなことないって」

レナの反応から凶星だとわかる。君は何かあったのかレナに尋ねる。

「だーかーらー何も無いってば。あんまりしつこいと爆発させるよ！」

レナは指先に炎を灯して脅してきた。いや、でも今さ、と君はそれでも追及しようとするが、エリスに止められた。

「ああ、そういうことね……実はレナはね、あなたのことが——」

「ストップストップストオーツプ！ 駄目！ それは駄目！ というかエリス告白したタイミングでそれはどうなの!？」

そこで区切られると非常に気になる。しかし、レナに振り向き様に涙目で睨まれ、君はエリスの話の続きを聞くのを諦めた。

「だから最初からそうじゃないって言ってるでしょ」

「誤魔化してるかと思うじゃん！ どう見ても告白してる現場だったしさあ！ ……んーでもそっかあ」

呆れたようなエリスの言葉でようやく納得した様子のレナ。勘違いは解けただろう
と思い、二人に一声かけて君はリルムたちの方へ歩いていった。

アルティメツトバーベキューガールズ！プロローグ③

「そーいえばや」

ソフィの説明に曖昧に頷いたリルムは、とにかく近くにいればいいということとは理解したようだ。君と肩が触れ合う……どころか、腕と腕が完全に密着するほど傍にきた。

そして動揺する君をよそに、ふと思いつ出したように切り出した。

「黒猫のひとは好きだけどここに居れるようになったんだよね？」

そうだね、と君は頷く。密着に関してはまあいいやと放り捨てた。

「どれくらいいるの？ 一週間で帰るーとか言い出したら檻に入れるしなくなっちゃうけど」

あんまりにもあんまりな言葉とは裏腹に、こちらを見上げる不安げな表情を見て、一年程過ごそうかと思っていることを伝えた。途端に輝く顔を見て、ただの自分の願望だから変わるかもしれないけど、と君は苦笑して釘を刺した。

「ううん、それでもいいよ」

実際はどうかかわからないと伝えたにも関わらず、リルムは真剣な声でそう言った。

「もし……。うん、もし、黒猫のひとがほんとに一週間で帰らなきゃいけなくなっても

さ、私なら——」

何やら覚悟を決めた顔のリルムに、そのときはちゃんと挨拶していくから、と冗談めかして被せるように君は言う。

その先を言わせてはいけなないと、君の直感が告げていた。

「むー」

真面目な話の腰を折られ、リルムは頬を膨らませた。何か拗ねているような、見たことがない表情だ。そんな顔でじつと見られていたたまれなくなり、君はついリルムの膨らんだ頬をつついた。

ぷすーと漏れた息が当たってこそばゆい。

拗ねた顔と気の抜けた音のちぐはぐさに、たまらず君は吹き出した。そんな君に釣られるように、リルムも一つため息をつき膨れっ面を笑顔に変えた。

「あ、黒猫のひと明日から泊まる場所とか決まってる?」

唐突な話題転換に面食らったが、いつもはこんな感じだなと思いつく。

君は決まるといって答え、そして気づいた。この世界での君は、何一つ、それこそ宿に泊まるお金ですら持っていないのだ。

今までは数日もすれば戻ることがわかっていたため、事件解決のお礼としてエリスや

ソフィの世話になることにそこまで罪悪感を感じなかった。しかし、一年間甘えっぱなしというのはいくらなんでも申し訳ない。

どうしようか、と二人して考え込む。

「うーん……私が泊まつてる宿、一緒に泊まる？　仕事探しながらさ」

いや流石にそれは……。

「黒猫さん」

後ろから声がかかり、君は振り向いた。一旦アパートに戻っていたソフィだ。何やら見覚えのあるような気がする書類を持っている。

「お仕事の話、良ければなんだけど……魔道士協会に入ってみない？」

その手があった、と君は手を打つ。

今までエリスやイーニアから何度も（強引な）勧誘を受けたが、いつ戻されるかわからないために断っていた。しかし、歪みを止めた今、もう断る理由もない。

これでお金の問題は解決し、残すは宿の問題だけだ。最悪返済のあてはあるから借金して宿を借りることもできるが。

「ダメだよ黒猫のひと！　借金はね……怖いんだよ！」

やけに実感の籠った声色に、もしかして経験者なのかと思わず君は問いかけた。

「ううん、エリスさんが言ってた！」

エリス……。

そうなると誰かに泊めてもらえるよう頼むのがいいだろうか。女の子に家に泊めてと頼むとは中々にハードルの高い話だと、今日はエリスの家に泊まるはずの君は思い悩む。

考えて考えて、アリエッタの家（遊園地）ならホテルぐらいしているのではと君は閃いた。

「アリエッタちゃんのお家に、宿泊施設はついてないよ？」

一瞬で案が消えてしまった。

それにしても、アリエッタは研究室で寝泊まりしているのだろうか？ それとも家で野宿……？ それは家とは呼べないのでは？

疑問がいくつも浮かぶが、アリエッタならどうとでもできるだろうと気づき、君は考えるのをやめた。

どうしようかと再び考え始めた君を、眠気が襲ってくる。欠伸をしつつ、そういえばもう日付が変わって結構経つなど、いろいろと疲れが出てきた頭が思い出す。

「明日のことは明日の自分にブツブツシャーでいいじゃん黒猫のひと」。帰って寝よ？」

そんな適当な……。口ではそう言いつつも、君の足は既にアパートに向いている。
「体は正直だなんてやつだね！」

そういえばソフィが持つてきたのは何の書類だったのだろうか。リルムの何かおかしな発言をスルーしつつ、君は疑問を口にした。

「説明は明日でいい？ 黒猫さんにとつて大切なことだと思うから、目が覚めてる時に聞いてほしいな」

成る程と頷きアパートに入っていく。廊下で見覚えのある檻を片付けているイーニアとミツボシとすれ違ったが、眠気で面倒になった君はおやすみとだけ言っておく。

アパートの勝手知ったるエリスの部屋に入った。が、明かりは消えており、レナやエリスはまだ戻っていないのがわかる。取り敢えず君は、敷かれたままの布団に背中のアリエツタを下ろそうとした。

……がつしり掴まれ、離れてくれそうにない。

仕方がないので軽く揺さぶる。……むしろしがみつく力が強くなった。強引に腕を引き剥がそうにも、臂力の差で歯が立たない。擦ってみるも、身はよじらせても力が緩むことはなかった。

君はため息をつき、背中の子さな怪獣ごと布団に入った。何か忘れてる気がしたが、まだ肌寒いこの時期、背中から伝わる温かさで意識がすぐに溶けていく……。

『……我、忘れられてる?』

翌朝、誰かに搔きぶられて君は目を覚ました。

「おっはよー! 黒猫のひと!」

朝から元気なアリエツタだ。目を擦りつつ君は挨拶を返した。窓からは朝焼けが見えるような時間だ。こんな時間から何かあつたつけ、と考える。

「今日はお花見でしょ? 早く行かないと場所がなくなっちゃう!」

そうだったと君は慌てて起き出す。この異界でも花見というのは人気の行事らしく、良い場所はずぐ埋まってしまうそうさ。ローブを手で払いつつ、アリエツタはもう支度できたのかと聞いてみる。

「ばっちり! 農家の朝は早い!」

余計に急がねばとカードから桶を取り出し、水の魔法で顔を洗う。

「おお? 黒猫のひとも魔道空間使えるのか。やるな。いや、んー微妙に違う?」

テーブルを見ると、二人分の朝食が残されていた。皆は先に出発したようだ。自分の朝食を申し訳なくも急いで掻き込みつつ、朝食を待たせてしまったことをアリエツタに謝る。

「わたしはもう食べたよ? あっちはまだ寝てる誰かのぶん」

そう言われて振り向くが、誰かが布団のなかにいる様子はない。そもそも君が寝ていた布団以外は、君が起きたときには既に畳まれていたはずだ。

誰もいないと口に出そうとして、何やら畳まれた布団から生えている水色の髪を見つけた。リルムだ。

近寄つてみると、畳まれた布団と壁の間に挟まつて器用に眠っているのがわかる。なぜ布団を敷かずにそんな風に寝ているのだろうか。

君は取り敢えず、耳元で名前を呼んでみた。

「うへへ……」

幸せそうな寝言が漏れたが、起きそうにない。今度は肩を揺さぶつてみる。

「……んん」

ぼんやりと目を開けたリルムに、君はおはようと挨拶した。

「……おはよ……黒猫のひと」

今にも二度寝しそうな様子に、顔でも洗ってきたらどうかと君は提案する。

「んー」

ふらふらと起き上がったリルムだが、どうにも足取りが危なっかしくて仕方がない。

どうにか君の肩を貸して顔を洗ってもらった。そこまでは良かったが、それで目が冴えるわけでもなかったのか、リルムは再び眠りに落ちた。横から全体重を預けられ、

すつ転びそうになる。

「黒猫のひとー! そろそろ出れるー?」

箒を取りに外に出ていたアリエッタの呼び声に返事をしつつ、立ったまま寝たりルムを背負い、君はひとまず外に出た。

「黒猫のひとつて飛べなかつたよね?」

君は頷いた。浮いたり吹き飛んだりはできる君だが、長距離の飛行は未だにできない。

「じゃ、私の箒と一緒に乗ってこっか!」

アリエッタの提案に君は頷きかけて、止まった。いつかの記憶が甦る。……アリエッタの運転は荒いのだ。非常に。

「わっはっは! だいじょうぶだいじょうぶ! 早く行かないとー!」

ぐいぐいと腕を引っ張られ、君は諦めてせめて安全運転で、とだけ言い含めて、ひとまずリルムを箒に乗せた。そして君自身も跨がろうとし――

『……おーい、我だ。抜いてくれ』

道端に突き刺さってテンションの低いエターナル・ロアを見つけた。なぜそこに刺さっているのだろうか。ひとまず引っこ抜いておく。

『すまん、恩に着るぞ……なぜ怪獣娘に渡すんだ!? おい、黒猫のあつ』

君は杖を持って飛べるか聞こうとしただけなのだが、アリエツタの魔道空間にしまわれてしまった。そんなつもりではなかったが、エターナル・ロアの恨み声が木霊した。とんだ冤罪である。

「杖はなー。バランス悪いからなー。先端だけ重いし。向こうで出してやろう」

「ふわあ……いま杖の人いた？」

叫び声に起きたリルムがあくび混じりに聞いてくるが、そんなものは居なかったと答えておく。どうせ向こうで出されるし、今のリルムに飛行は不可能だろう。

「そっかー。いなかっただかー……すう」

リルムは再び眠りについたようで、君は探されもしない杖に少しだけ同情した。

いよいよ出発ということで、君はぶん回される覚悟を決めた。せめて眠っているリルムを落とすようなことはすまいと、前に乗せたリルムに腕を回して箒を掴む。

……眠っているはずのリルムがビクリと跳ねた。

「じゃあ……しゅっぱーっ！」

君の予想をいい意味で裏切り、箒は滑らかに離陸した。そのまま看板を潜り抜け、緩やかに加速し、町を抜ける。両手を離しても落ちないほどに、箒は安定した飛行を続けていた。

草原を遙か眼下に、心地よい風が君の頬を撫でる。

「驚いた? 驚いた?」

期待した声で聞いてくるアリエツタに、君は素直に驚いたことを伝えた。三人乗せているにも関わらず、以前とは安定感が段違いだ。

「わはは! 練習した!」

……アリエツタが、練習を? どういった風の吹き回しなのかと思わず君は口走った。

「前に黒猫のひと乗せたとき、二度と乗りたくないって言われたのがな。わりとシヨックでな」

そんなこともあつたなと君は回想する。あれは初めて会ったときで——
「一年ぐらい前だっけ?」

もう一年近く経っているのかという驚きと、まだ知り合つて一年しか経っていないのか、という真逆の驚きが重なる。

信頼も絆も間違いなくあるのに、この異界なら赤の他人でも知つていないことを知らない。面白い関係が続けてきたものと、君はしみじみ思い返す。

けれども、これからは皆をもつと知つて、自分をもつと知つてもらつて、もつと仲良くなれる。そういう時間が、今の君にはある。

「また一緒に飛びたいなつて思つてたからね! 今は叶つていい気分だ」

これからはいつでも付き合えるよ、と思わず君は口にした。ほんと!? と嬉しそうな声に笑顔になりつつ、君は空を仰ぎ見る。

青く澄んだ空に穏やかな風、絶好のお花見日和だ。

やがてポツポツと淡い色の花が見え始めたあたりで、箒は高度を落とし始めた。ここからでもわかるほど大きな森が、お花見兼バーベキュー会場だろうか。そろそろ着きそうだということで、君はリルムを改めて起こすことにした。

「……おはようー!」

あつという間に目覚めた。先ほどの差に、君は訝しげな視線を向け、腕を離れた。

「まーまー気にしない、気にしない!」

離れた腕を掴まれ、再びリルムを抱き締める形にされる。君の抗議にも、どこ吹く風といった表情だ。……と思つたが、頬が少し赤らんでいる上に軽く震えているのが、君の腕に伝わってくる。

いつもの袖無しの服のまま連れ出してしまっていたことに君は今更気づいた。その格好では寒くて当然だろう。

寒いなら寒いって言ってくればいいのにと、君は着ているローブを脱いでリルムに被せる。脱いだ瞬間から襲い来る想像以上の冷気に、君は身震いした。

「お？ んー。まーこれもこれで中々……」

リルムのよくわからない呟きに構う暇もなく、君は慌ててもう一着上着を取り出して羽織る。分厚い生地が冷気を遮断し、一息吐いた。

「とうちやーくー!」

そうこうしているうちに、目的地についたようだ。

暴風を撒き散らすこともなく止まる筈から降りて、地面に立つ。桜に囲まれた広場の入り口で、君は思わず感嘆のため息をついた。

そのままぼんやりと見惚れていた君の手を、二人が握る。

「黒猫のひとー? 行こ?」

顔を覗き込まれて、そのままアリエツタとリルムとに手を引かれる。広場の向こうでこちらに手を振るレナやエリス、その足元では師匠が花びらを追いかけて遊んでいた。楽しくなりそうだと期待に胸を膨らませて、君は一步踏み出した。

『戦乱の歴史を繰り返す異界』

覇膝戦線：ルドヴィカの場合

「誰よりも強くなりたかった」

リヴェータ達を救い出すまでは、君とルドヴィカで話すことが多かった。一旦は距離を置かれそうになったこともあったが、何だかんだで仲良くやれている自負はある。そしてそれは、救出に成功した今も変わらない。

「誰のために、とは聞くな。人は誰しも心に支えがある」

珍しく、二人で話したいとわざわざ招かれ、雑談をして。そんな中で君にポツリと打ち明けられた、ルドヴィカが力を求める理由。聞かなくても、誰を想っているのかなんて簡単に想像がつく。

「私にはその者の名を口にする資格がないのだ」

君は、その誰かさんがどう思っているのかも知っていた。だからこそ、君はその自虐をはつきりと否定できた。

「何故だ？ 私はあるの子から全てを奪って……」

資格があるか決めるのは、ルドヴィカじゃなくてその人だろう。揺れる目を覗き込み、君は続けた。

「だったら尚更、私が許される道理などないだろう」

君の脳裏に浮かぶ少女は、もう未来を見据えている。ルドヴィカだって、憎むとか恨むとかは一発ぶん殴ればもういいと、そう言われたはずだ。

「……それで納得できるはずがない」

それはルドヴィカがじゃないか、と言った君に、ルドヴィカは目を伏せて答えた。

「そうだな。そんな償いでは、私は自分を許せない」

もう自分を許してあげてもいいだろう。そんな言葉を君がかけても、きつと届かないだろう。だから君は代わりに、償いが終わったらどうしたいか尋ねる。せめて、その先々に希望を持っていて欲しかった。

質問の理解に戸惑うように瞬きをしたルドヴィカは、緩やかに首を振った。

「正直考えたこともなかったな、そんな事は。何をしたいか、か……」

君の予想通り、ルドヴィカは償うことに全てを懸けていた。このままでは、そのまま燃え尽きてしまいそんな予感がする。

考え込んでしまったルドヴィカに、本当にやりたいことはないのかと君は改めて尋ねた。誰かのこうするところを見たいとかでも、平和に観光をしたいでも、何でもいい。

「それならば……。あの子が幸せをつかむ瞬間が見たい。私が奪ってしまったものだから、な」

込められた躊躇いと自嘲を意図的に無視した君は、幸せをつかむって結婚とかかな、と口にした。

「あの子の結婚式か……。私でも出席はさせてもらえるのだろうか」

間違いなく呼ばれるはずだ。そして、ルドヴィカは号泣するに違いない。冗談めかしてそう言ったものの、多分現実になったら本当に泣くんだろうなあ、と君は思った。

「全く。あの子が人生を任せられる相手が見つかってどうして泣くと……。相手？」

幸せな光景を想像していた笑顔から一転、君に錆び付いた蝶番のような動きで向き直ったルドヴィカの表情は、無だった。

「なあ、魔法使い。その相手って誰だ？」

うっかりジミーとでも冗談を飛ばさそうものなら、悲惨なことになる。そう君に確信させるだけの圧があった。

特にそういう話は聞かないと君は無難に返答し、むしろどんな人なら付き合えるんだろうね、と苦笑した。

「私としては、あの子を守るような強さを持つていてほしいな。後は……。きつと信じられる相手に飢えているだろうから、あの子が心から信頼できる人であってほしい。私

が言えることでもないがな」

中々に厳しい条件だね、と君は苦笑いしたままルドヴィカを見た。リヴェータを守れる力がある人という時点でそう多くはないのに、更に信頼を勝ち取れというのだ。

あまり人を信頼しないようにしてきた、と本人から聞いている君には、それをクリアする男性は存在しないのではないかと疑問が浮かぶ。とはいえ、今はいなくてもこれからは現れるかもしれない。リヴェータは変わることができたのだから。

厳しい条件だという君の言葉に、条件を挙げていた本人であるにも関わらずルドヴィカは頷いた。

「そうかもな。まあ、私がそんな人と結ばれてほしいと思っただけで、本人がどう思っているかは知らん。あの子はもう、自分で決めて進んでいけるだろうしな」

そもそもリヴェータに結婚願望があるのかもわからない。話の前提が崩れて、会話が一瞬止まった。

「まあ、あの子がどんな道を歩むにせよ、だ」

真剣な顔つきをしていたルドヴィカは、そこでふつと頬を緩める。その穏やかな微笑みは、戦士になる前のルドヴィカが浮かべていた表情のような気がした。

「いつまでも見守っている。それが、私にできることの全てだ」

それはきつと、できることであると同時に、これからもしたいことのはずだから。

やりたいこと、見つかったね。君は目を細めてそう言った。

特別に何かを変えてもなくて、ただ見守ること。それがルドヴィカの望みらしい。もつと欲張つていいとも思うが、今はやっと見つけたものを噛み締めてもらうことにした。

「そうか。これが私の願い、か。……存外近くにあるものだな」

何かを確かめるようにゆっくりと目を閉じて、ルドヴィカはそう呟いた。

「今までの私も、間違いではなかったのだろうな。いや、間違つたことも無駄ではなかった、と言うべきか。ずっと迷つてきたが、今ならそう思える」

やがて開いた蒼眼には焦りも迷いもなく、君は安堵した。きつともう大丈夫だろう。

安堵と共に眠気が襲つてきて、君は欠伸を漏らした。随分長い間話し込んでしまったようで、気づけば外はもう真つ暗だった。もうとつくにいつもの君の就寝時間を過ぎているだろう。

「もうこんな時間か。すまない、すっかり付き合わせてしまったな」

ルドヴィカが心配でついつい余計な口を挟んでしまっただけ、と君は首を横に振つた。

「心配？ 私がか？」

あのままだとルドヴィカがいつか空っぽになつちやいそうで、とお節介な想像を素直

に話す。そうなる前に誰かが何とかするだろうとは思ったが、それでも動かすにはいられなかった。

「……いや、魔法使いが話してくれて助かった。お前でなければ、こうも正直に自分の未来を考えることもなかっただろう。それに、歩んでいる道がきつと正しいと思えたのもお前と出した結論だからだ」

それは買い被りすぎだと口に出そうとして、君は気づいた。リヴェータは信頼できる相手に飢えていると先程言っていたが、むしろルドヴィカの方が深刻なのではないだろうか。

グランフアランクスに、ルドヴィカを気遣える団員はいたのだろうか。故郷を滅ぼす引き金を引いた罪悪感に苛まれ、それでもリヴェータが折れてしまわないように、立ちかかる壁を演じていたルドヴィカを。

いや、違う。気遣った結果が今なのだろう。君はかぶりを振った。グランフアランクスの面々は、ルドヴィカの覚悟を尊重しているからこそ何も言わなかったのではないだろうか。

ただ、いつでも気を張り詰めるような環境でそれを吐き出す相手もない、それでは壊れてしまうかもしれない。

だから君は、辛かったらいつでも言つてと、いつかと変わらず冷たい手を握つてそう

言つて、愚痴を聞くぐらいしか出来ないけど、と苦笑した。

手を握られ狼狽していたルドヴィカは、そんな君の言葉に目を見開いた。

「自分で辛いと思うことはなかつたはずなんだが……。罪滅ぼしのためだ、弱音は許されないと思つていた」

覚悟を汚してしまう余計なお世話だつたかな、と君は反省したが、制止された。

「いや、違う。……その、嬉しいんだ。お前にそう言つてもらえて、本当に。他の面々にはとても言えないが」

やはり、心のどこかに溜め込んできたものはあるらしい。辛いとか苦しいとか、他の皆には言えなくても、自分には吐き出してもいいんだよ。再度気遣う君に、ルドヴィカは小さく首を横に振つた。

「本当にお前は……。いや、止めておく。これ以上甘えてしまつては、多分取り返しがつかなくなる」

甘えることも許さないなんて自分に厳しい人だな、と君は見当違いの感想を抱いた。ともかく、これでやることも無くなつたので、君は疲れと眠気で重い体を動かし、お休みと言ひ残して寢床へと帰ろうとする。

「待つてくれ、魔法使い」

呼び止められて君は振り向いたが、まぶたが重い。

「その、礼をだな……しようと思っただが」

隣に座るように身ぶりで誘導され、君は寝台に腰かけた。煮え切らない言葉に疑問が生じるが、黙って聞く。

「私は、こういう時どうしたら良いのか分からないのだ」

別に自分が好きでやったことだから、そんなに気にしなくても、と夢現ながら反応した君に、ルドヴィカは自らの膝を叩いて示した。

「できる」とは膝を枕にしてお前を癒してやることくらいだ。来い」

誘われるままに君は頭を下ろしていき、やがて膝枕の体勢となった。固いの柔らかく、温かい。支離滅裂な思考と共に、このまま寝てしまいそうだと呟いた。

「ああ、それでいい」

閉じていく視界の中で、優しげな光を携えこちらを覗く蒼い眼と目が合つて——眠気を振り払った。流星におかしいだろう。体を起こそうとした君は、しかし簡単に押さえ込まれた。

「私なりの礼の形なのだが、駄目か？」

そう言われては断れないと自らに言い訳をして、君は再び目を閉じた。やがてそのまま、眠りに落ちていく。

(熟睡できなかつたことに感謝する日が来るとはな)

膝枕をしながら寝ようがなんだろうが、睡眠の質が低いことには慣れきつていた。あの日以来、まともに眠れた試しは無い。

しかし、今日は。

(ゆっくり寝られそうな気がするな。こんな姿勢だが、温かい。なら、隣で眠ることができたら……ああ、不味いな)

自身の思考に苦笑して、寝顔から視線を動かし天井を見上げる。伝わってくる温もりに、正直に言えば依存しかけていた。日頃から側にいられるリヴェータに嫉妬を覚えてしまうほど、だ。

(こちらに拐ってしまったら、あの子はどんな顔をするんだろうな)

今度こそ完全に仲違いすることになるだろう。リヴェータにとつても大切な存在であることはわかっている。

(それでも、それでもだ)

かつて敵だった自分にすら寄り添う、底無しのお人好し。この温もりは、どうしようもない孤独を抱える者にとっては強い薬物のようなものだ。

あの怪物ですら魅了してしまったのがいい例だろう。時間をかけて話していれば、あのギンガ・カノンですら絆してしまうのでは、とすら思えてくる。

(……そろそろ私も眠るか)

あまり遅くまで起きているわけにもいかない。少しばかり惜しむ気持ちを抑えて上体を動かし、なんとか眠れる体勢を作った。寝台の縁にもたれる窮屈な姿勢だが、気分は悪くない。

「……お休み」

安らかな寝顔にそう呟いて目を閉じた、その直後。

「ルドヴィカ？ 入るわ、よ……」

考えうる限り最悪の展開が起きた。

『かつて魔法文明が栄えながらも、今や魔力を失って久しい異界』

へウイズメア：君の見た夢 I

「……魔法使いが昨日もこの街に？」

穏やかな昼下がりのへ巡る幸い亭、注文されたデザートを片手にリフィルは首を傾げた。

「そんなひよいひよい行来できるもんだったか？　一昨日帰ったばかりかだよな？」

「そうなんだがな……。黒いローブにカードで魔法を使うやつが、他にいるとは思えん」
先ほど店にやって来たレτζジが切り出したのは、黒猫の魔法使いが再びこの街に現れたという話だった。

客はいつもの面子のみで、先の戦いの休暇も兼ねて祝勝会でもしようかというタイミング。

「今から呼んでこれば祝勝会、全員でできますね！　ちよつとひとつ走り行ってきます！」

「ほんとにそうならいいんだけど。本人だとしたらちよつと妙なところもあるし——。魔法使いさんに憧れた誰かさんの見果てぬ夢、なんてこともあるんじゃないか？」

つ、とりピユア、そしてリフィルへ、意味ありげに視線を送りつつルリアゲハが口を挟んだ。視線を向けた先で無言で睨まれ、肩をすくめてくるりと見渡せば、各々が思案気な顔をしている。

昨日は借家に帰ってきてきていないこと、顔を見せに来ないこと。

「あまり考えたくはないが……」

ラギトが口を開いた。しかし、その先を言い淀む。

誰もがまず思いつき、また誰もがそうであつて欲しくはないと願った可能性。

つまり——

「……魔法使いさん自身の〈ロストメア〉だつてことも、ありえないわけじゃないですよ
ね」

コピシユの言葉に、場の空気が重くなった。普通は、先にそう考えるはずなのだ。誰かの姿をした〈ロストメア〉なら、願主はその人物だと疑う。

それでも。

「あいつが、夢を諦めるようなタマかね？ 俺にやあちよつと、信じられないんだが」

夢を見て、追つて、叶える。自分達には出来なかつたことで、だからこそあの大切な

友人には叶えてほしい。そんな勝手な期待と、誰かのために戦うお人好しな彼が報われてほしいという願いがあつて。

そして何より、彼が夢に懸ける想いの強さを知っている。敬愛する師匠を人に戻し、並び立つ。何があつて何処にいたとしても、そこだけは揺らがなれないという確信があつた。

そんな彼が夢を諦めることがあるとするなら、それは――。

「いやいやいや！」

葬式染みた雰囲気強引にでも吹き飛ばそうとしたのか、大袈裟な身ぶりを交えてミリイが話し始めた。

「まだ魔法使いさんのヘロストメアで決まったわけじゃないっすよね？ ルリアゲハさんが言つてたみたいに別の誰かが見た夢だったとか、というかそれこそ本人つて可能性だつてまだ――」

「それはないわね」

リフィルに斬つて捨てられ、ミリイは口を中途半端に開いて止まった。なんでつすか!?! と器用に伝える顔に、リフィルはいつも通りの淡々とした口調で、淀みなく言い切つた。

「魔法使い本人だったら、最初に私のところに来る筈なもの。私がどこにいても、ね」

重量級の信頼に、その場の皆が顔をひきつらせた。なにか言おうと口を開いて、なにも言えずに口を閉じる。

なぜ妙な空気になったのかと、リファイルは疑問符を浮かべていた。

ゼラードが、年長者として若人の青春を弄つてやろうと口を開く。或いは、空気を換えたかったのかもしれない。

「——お父さん？」

そしてなにか言う前に娘に怒られた。へいへい、と肩を竦める子煩悩の代わりに、レヅジがなんとも言えない顔で疑問を投げ掛けた。

「その……なんだ、へ黄昏。おまえと魔法使いはそういう関係なのか？ あ、いや、たいした信頼だと思つてな」

「……は？」

心底意味がわからないと言いたげな返答をしたリファイルに、ニヤニヤ笑うルリアゲハが追撃を加える。

「リファイル。あなた、自分が何を言ったかよく思い出してみ？」

五秒ほど考え込んで、リファイルは勢いよく顔を上げた。

「いや、あの子のカードが繋がってるのが私だから魔法使いがこの世界に来るなら私の近くに出るはずだつてことでほら森に行ったときでもそうだったじゃないだから魔法

使いなら絶対会いに来るとかそういう自信満々な態度で訳じやないわよ本っ当に付き合ってるわけでもないのに、言葉だけならストーカー扱いしてるようなものじやないっていうかあなたたちもカードのことは知ってるはず」

複雑な呪文を唱えてきただけあり、息継ぎなしで叩き込まれる怒濤の言い訳には誰も口を挟めなかつた。何とか仏頂面を作ったつもりのリフィルに、頬が赤いと突っ込みを入れられる人物もまた、いなかつた。

「おお、一息で言い切つた。すごい肺活量だね」

「確かに凄いが今はそこじやない。ピュアメアのカードか。そんな効果があるとはな」

「……リフィルさんのあんな顔初めてみる気がするんですけど、中々の破壊力ありますね」

「ああ、魔法使いにも是非見せてやりたいところだな。いや、案外もう見ていたりするの
か？」

リピュアの妙な感心に律儀に突っ込みを入れるレッズのいつものやりとりと、ひそひそと会話するラギトとミリィ。

落ち着いたところで、仕切り直すようにラギトが尋ねた。

「そういえば、どういう報告があつたんだ、〈車輪匠〉。詳しい話があつた方が余計な想像をしなくて済む」

「ああ、わかった」

そういうと、レッジは鞆から書類を取り出し捲り始めた。紙面を広げて見せて、説明を始め——ようとしたりとここで、店の扉が開いた。

「生憎だけど、今は貸し切り中よ。出直し……て……」

リフィルが応対に向かい、何故か硬直した。何かあったのだろうか、唯一それに気づいたミリイが様子を見ようと立ち上がった。

「魔法使いに助けられた、助けるところを見た、という市民は何人かいる。ただ気になるのが、ウイズらしき目撃情報が無いんだ——」

背後で気になる話題が流れ、思わず振り向く。さつさと片付けて後で聞こう、そう考えて視線を扉に向けた。

そこには、魔法使いがいた。

「おー、うすうす、魔法使いさん。丁度話題になつてるところなんで此方のテーブルについてええええ本人!」

手を引いて案内しようとして、唐突に一人叫んだミリイ。流石にその叫びには気づいたのか、一斉に視線が魔法使いを突き刺す。そこで、気付いた。

「……〈ホストメア〉?」

驚きや警戒の視線を一身に受け、魔法使いは——

——いや、「君の見た夢」は冗談めかして、どうも皆さん「黒猫の魔法使いの夢」です、と挨拶した。

行動が読めないために、メアレスの各々は自らの武器に手を掛け、注意深くへロストメア〉を見つめる。知り合いの顔をしているとはいえ、〈夢〉と本人の性格は一致しないことはメアレスにとって常識だ。

〈夢〉は舞台俳優の如く大きく一礼し、笑顔で視線を巡らせる。その笑顔に違和感を感じた。押し殺された感情が、漏れだしている。

「……そうか。本当に、魔法使いのままなんだな」

確信を持った眩きと共に、一つ息を吐いて武器を下ろした一同に、〈夢〉は首を傾げた。警戒しなくていいのかと問いかけてくる。

〈ロストメア〉なのに〈メアレス〉を氣遣うことを言う、それがまた「らしく」って、自然と笑みを溢していた。

「警戒されて寂しいけど、笑顔で誤魔化そう——って顔してるの、氣づかれないと思ったか？」

そんなゼラードでもはつきりわかる顔をしているのか、とショックを受ける〈夢〉に、こちらでも微笑みを浮かべたコピシユが声を掛ける。

「まあまあ、魔法使いさんは〈夢〉も魔法使いさんそのままなんだってことですよ」

「ほーんと、ウイズちゃんがない以外は何にも変わってないわね？」

ウイズがないのは自分がそういう夢だからだよと、〈夢〉は苦笑した。そこにミリイが疑問を投げ掛ける。

「魔法使いさんの夢って、ウイズさんを元の姿に戻すことじゃなかったんすか？ てつきり人間に戻ったウイズさんの姿の〈ロストメア〉が出てくるのかと……あ、それともその夢はもう叶ってたり？」

残念ながら、まだウイズを人間に戻すことは出来ていない。けど、手掛かりを探す旅はまだ続いているから。〈夢〉はそう答えた。

その旅は、〃君〃にとつて夢と言うよりは義務に近いものだ。夢なら諦めることもあるかもしれない。だが、それが義務ならば、〃君〃が止まることはないだろう。〈夢〉は内心溜め息を吐いた。

そんな内心はおくびにも出さず、実はウイズを元に戻せるチャンスは一回だけあったんだけどね、と別の話題に切り替えていく。

「あんたはそういう機会を掴むのが上手い人間だと思ってたんだが……逃したのか？」

意外そうな顔のラギトから視線を外し、その〈夢〉はノクトニアポリスでの顛末を思

い返す。

——逃したというか、師匠の元の姿と世界の危機を天秤に乗せたら、師匠から怒られた。

説明の面倒な諸々を省き端的にそう表現した〈夢〉に、呆れと驚愕の視線が向く。

「それはまた、えらく壮大な話つすね……。こう言つていいのかわかんないですけど、そのまんまそういう劇のクライマックスになりそうな」

実際、願い主のクエスⅡアリエスでの戦いはそこで一区切り付いたから、クライマックスというのは強ち間違いない。劇にはならないと思うけど。そうおどけた〈夢〉に、目を丸くした。

「魔法使いさん、元の世界でもそんな世界を懸ける派手な戦いしてたの？ まったく聞いたことなかったんだけど」

じつとりと見つめてくるルリアゲハに、思わずごめんと〈夢〉は謝罪した。

別に本人でもないのに、別の存在なのに、そうしてしまった。記憶と夢に引き摺られているのを認識して、〈夢〉は自嘲する。

「結局、話してはくれないのかしら？」

いつもの淡々とした口調——ではなく、どこか拗ねた声色でリフィルがそう言った。

一方的に知られて一方的に手を貸される、それはフェアじゃない。こつちだって事情

を知りたいし、できることなら手を貸したい。言葉に詰まった困り顔を隣から覗き込む。

別に無理強いするつもりはない。どうしても話せないならそれでも構わなかった。だが反応を見る限り、そうではないのだろう。そう判断したりファイルは、〈夢〉の目をじっと見つめ続ける。

数秒迷って、〈夢〉は吹っ切れたような顔をした。今の自分は別物だから、いつか。誰にともなくそう呟くと、何から話せばいいか纏まらないから、そつちから質問してほしいと頼んできた。

「……えっと」

そう言われるとむしろ言葉に詰まる。なにせ、謎が多すぎるのだ。経歴はおろか名前すら知らない。この都市に来るのは必ず事件があるときで、ゆつくり話す暇もない。飛び抜けた人柄のよさがなければ、こうも仲良くなることはなかっただろう。

「はいはいはい！」

そういった人間どもの躊躇いを他所に、ピュアの化身な妖精が手を挙げた。

「やっぱりまずは自己紹介から行こーよ！ その後で、魔法使いさんのお話を聞かせてほしいな」

よしきた、と思いの外乗り気な彼は名乗りを上げた。『夢』の例に漏れず、高らかに、

誇らしげに。

——改めまして “黒猫の魔法使いの夢” もとい “この街に生きる夢” です。

<WIZMARE> / <WITHMARE> II

隣にいてほしい——だなんて、口には出していないけれど。きつと誰しもが、そんな夢を見ていた。

気のいい友人として、頼れるパートナーとして、或いはもつと大切な何かとして。

叶わない願いを、どうしようもなく抱いてしまった。

「いやはや流石というべきか。メアレスに夢を魅せたとは、悪い魔法使いもいたものだ」
巨大ロストメアが倒され、魔法使いが帰った夜。言葉とは裏腹に、アフリトは楽しみに月夜を仰いだ。

「ロストメアが生まれないとはいえ、願う力がないわけではない。——黒猫の魔法使いの夢、少しばかり利用させてもらおうか」

その夢は、思考を止めるのに十分な衝撃を持っていた。だって、それは。

「ほうほう。いい夢だね！」

リピユアの嬉しそうな声に、一度吹き飛んだ思考が、意思とは無関係に口を動かした。

「……いい夢ね、本当に」

噛み締めるような言い方をしたところに、ちらりと視線が飛んでくる。どうやら思ったことは皆同じだったらしい。

ただ、気になる点はある。

「ウイズのことがある限り、魔法使いはそれ以外の夢は持たないと思っていた。……どうしてお前という『夢』が——」

目線がぶつかり、〈夢〉からレッズが顔を逸らした。気持ちはよくわかる。どうにもあの顔に見つめられると、後ろめたさが胸を刺してくる。

だからと言って、ここで話を終えてもらうのは少々困るから、私が言葉を引き継いだ。「街に来る度に命を懸けた戦いに巻き込み続けて、何かを返すこともできていないのに。

……魔法使いは、こんな場所で生きたいと、本当にそう夢見たの？」

ぶつけた疑問がどんな表情を呼んだのか、確認するのが怖くて目を伏せた。らしくもない面倒なことを言っている自覚はある。使い倒すだなんだと言いつつも、内心は情けないほどに臆病だった。

ディルクルムに大敗したとき魂が崩れるのも厭わず手を伸ばされたこと、夢の繭から生まれたあの巨大ロストメアに呑まれたときは、その体内にまで助けに来られたこと。普通は大切に思われていると信じるのに十分な行動だろう。

そこまでして助けたいと想う大切な人がいる、だからその異界で生きたいと願った、

なんて都合のいい論理で納得できれば良かったけれど、ここまでされても私はまだ信じられない。

あの人なら、どこでも、誰にでも、きつと同じことをできるだろう。『人のために戦うのに、否やはない』といつか言っていたけれど、それは冗談でもはったりでもないただの事実だ。

だったら、何が特別なのかなんてわからない。特別でないものに生まれるほど、
 “は軽いものじゃない。
 だから——

「散々助けてもらったのに、まだ信じられないみたい。だから、我儘で悪いけど教えて。なんであなたという『夢』が生まれたのか」

苦笑いを浮かべるその〈夢〉に、顔を上げて視線で答えを急かす。

一つ頷き困り顔を引き締めて、ゆっくりと〈夢〉は口を開いた。

——この街の皆が好きで、もっと皆と一緒にいたくて、やってみたいこともたくさんあって、この街で生きたいと夢見てしまった。自分はそういう『夢』だ、と。

この場の一人ひとりを順に見つめながら、そう言った。飾らない言葉は魔法使いとそっくりで、でも声色には〈夢〉としての誇りが詰まっている、嘘偽りのない本音だった。

誰も何も言えなかった。欲しかった言葉をこの上ない形で出されたから、当然だ。ただ、出口が見つからない感情が跳ね回って、鼓動が喧しい。

もちろん師匠も大切なんだよ。だけど、自分っていう夢が生まれたくらいには、この都市のことも、皆のことも、大好きだつてことで。

そう付け加えて、ウイズには内緒にしといてね、とおどける〈夢〉。やつと感情が追い付いた私には、呆けたような笑いが込み上げていた。

「本当にあんたは……っ！」

「……敵わないわね、やつぱ」

珍しく肩を震わせ声を上げて笑うラギトに、しみじみと眩き、でも確かに口角が上がっているルリアゲハ。それ以外の面々も、目に涙が浮かぶほどだったりただただ愉快そうにだったり、全員が笑っていた。

「んじゃ、改めて乾杯と行くか！」

皆が一頻り笑い終えた頃、酒を片手にゼラードが音頭を取って宴会が再開した。既に酔っているかのような機嫌のよさだ。今なら一食くらい奢ってくれるかもしれない。

「あんたの分は俺が出しておこう」

あの〈夢〉も、当然のように輪に入れられていた。魔法使いに奢ろうとしては遠慮さ

れていたラギトが、念願かなって奢りに成功していた。どことなく得意顔をしているが、それでいいのか。

「本人じゃないがいいのか……？」

堪えきれなかったレツジのツツコミを尻目に、取り敢えず追加の料理と酒を運び、私も輪に加わる。次はあなた本人が参加してくれるといいのだけれど。

宴会を楽しんだ帰り、後片付けをするというリフィルとリピュアを残し、〈夢〉とルリアゲハはいつものアパートへとのおんびりと歩いている。

本人ではないえないあれやこれやをこつそり暴露したりと話は弾んだが、ふと会話が途切れ、無音の時間が生まれた。

するりと前に出たルリアゲハは酔いを感じさせない足取りで、〈夢〉に振り向き様に問い掛けた。

「あなたは、これからどうするの？　『夢』は叶ってるから、そのままこの街に住むのかしら？　それなら家は魔法使いさんの部屋を使うとして、申し訳ないけどロストメア狩りには——」

自分よりもルリアゲハはこれからどうするの、と。どこか確信をもった疑念がぶつけられる。ちよつと冷静じゃなかったわね、とルリアゲハは溜め息を吐き、そしてぽつり

と呟いた。

「妹に、会いに行くわ」

止められそうかな、と心配そうな声に、ルリアゲハは笑顔をなんとか作って返答した。「正直言つて、どうなるかさっぱりわかんないのよね。そのまま向こうで領主になることだつてあるかもしれないし。だから申し訳ないけど、組む相手は新しく探してちょうだい」

笑顔が崩れないうちに畳み掛けるように言い終えて、ふらりと立ち去ろうとした背に、いつまでならこの街に居るかな、と質問が飛んできた。

「明後日の黄昏時に発つつもり。そこで一旦はさようなら、その後は神のみぞ知るってね。それじゃ、おやすみなさい」

話すうちにいつの間にかやらアパートに着いていて、ルリアゲハはひらりと手を振り部屋に入つていつてしまった。それを見送つた〈夢〉は、思案気な顔で壁にもたれかかる。ふと見渡した近くの街灯の明かりに、煙が漂うのが見えた。その後すぐに、足音もなく気配が〈夢〉の背後に現れる。

「……お悩みかい、魔法使いの夢”よ」

んー、ちよつとね、と曖昧に返事をされ、アフリトは相変わらず真意の読めない笑みを向け、囁いた。

翌日、黄昏時。『魔法使いの夢』は、メアレス達と対峙していた。なぜか他のロス
トメアは全く動きを見せない。

「前にも似たようなことがありましたっけ。この街にいれば叶うんだったら、ここで生
きればいいと思うんですけど、それは人間の傲慢っすかね」

「ピュアメアもあいつも、変わらず〈夢〉だからな。叶わずにはいられない。ただ、あの
時みたたく横で棒立ちしているわけにはいかないだろう」

「無駄口を叩いている余裕はない。……何が飛び出してくるやら」

〈夢〉がカードを引き抜き、リフィルが〈秘儀糸〉を伸ばし。それを合図に、戦闘が
始まった。

君と見た夢 Ⅲ

門を目指そうと思う、と。わざわざ私たちを集めて〈夢〉は、そう言った。何があつたのか、昨日には無かつた戦意を目に乗せて。

駆け出しながらカードを手に詠唱を始める〈夢〉の、進路を阻むようにラギトが踏み込んだ。伴つて起きた轟音に、思わず石畳が砕けていないか確認したい衝動が芽生える。

「悪いが、あんたが相手じゃ加減は出来そうにない。最初から飛ばしていくぞ?」
翼のように魔力を吹き出し加速する姿を視界に捉えつつ、私も詠唱を完成させた。そのままタイミングを合わせ、一斉に解き放つ。

「修羅なる下天の暴雷よ、千々の槍もて降り荒べ!」

「ブラストウィール!」

「流石の魔法使いさんでも、7人相手は厳しいんじゃないかしら!」

張られた障壁に突き刺さる雷、矢、銃弾。それらと共に叩きつけられたルリアゲハの挑発に、ニヤリと悪戯気な笑みが返された。何かしらの考えがあるのだろうか?

真意を測るより先に、ラギトがヒビの入った障壁を殴り抜いた。限界を迎えた障壁が砕け散る中をそのまま前進、ロストメアへ痛烈な一撃を叩き込もうとし――

その結果を確認することなく私は全力で横に飛び退いた。すぐ側を暴雷が駆け抜けていく。

「ゲイルウィール！」

咄嗟に加速したレッヅジを追いきれず、無数の光の矢が地面を削った。視界の端では、ラギトが魔性の鎖で絡め取られ、投げ飛ばされている。

響く剣戟の音、先に回り込んでいた3人も状況は同じだろう。魔法の出所、屋根の上に視線を向ければ、秘儀系を構えた〈私〉がいた。

なるほど。

「そう来るか……！」

「ミリイの夢を思い出すわね。……人形もなしで魔方陣だしてること、もしかして今のリファイルと？」

「厄介だな。前ほどの実力差がないと考えると、自分を相手取っている間はロストメア本体まで手が回らない」

レッヅジの言う通り、先程の攻撃は私が詠唱して撃つのと同程度の火力があった。負ける気はないが、手早く殲滅して本体を追うというのは不可能だろう。人数は向こうの方

が多いと考えられる以上、集団戦を挑むのも得策ではない。

思考を走らせつつも敵を睨むが、動く様子はない。当然だ。時間を稼げば目的は果たされるのだから。屋根の上には私の、脇道にはレッジの姿をした悪夢のかけらが構えていて、容易には抜けれないだろう。ただ、一つ付け入る隙があるなら……。

「ルリアゲハの姿のかけらはいないようね？」

「いや、罠だろう。人手が足りているのにわざわざ三人に二人をぶつける理由もない」
探査用のウィールを手に取り、レッジが続けた。

「先にそちらを炙り出す。相手の罠は利用してこそ、だ」

安全策をとるならそれが正しいのだろう。しかしそれでは、恐らく間に合わない。とはいえ、こうして悩んでいる間も時間はなくなっていくが。

そんな折、顎に手を置いて考えていたルリアゲハが突然苦笑いを浮かべた。

「……あー、わかっちゃったかも」

「何がだ、〈墜ち星〉？」

「あれ、多分個別のロストメアってこと。それなら……。あたしが突っ込んでくるから、二人は足止めをお願い」

説明がまったく足りないが、今は時間が惜しい。中々に危険な作戦だが、ルリアゲハが何の考えもなく無茶を言うとも思えない。どちらにしてもこちらに策はないので乗

るしかない。

「……わかった」

私も頷き、自分の形をしたロストメア？ を睨む。戦意を感じたのか、敵も警戒を強めている。

「相談は終わりがしら」

あちらの私が、最終通告を投げ掛けてきた。悪夢のかけらに会話能力はないので、やはりロストメアなのだろう。自分と会話する、というのは妙な気分だ。

あのロストメアは私の見た夢なのだろう。初めての、見せられたものでない夢。夢だとは知らなかった、わからなかったままなくしたものだけれど、やっとわかった。あれは私だ。強がって笑って見せた裏の、みつともなく引き留めようとした。

だったら尚更負けられない。また会おうと約束して送り出したのに、無理矢理繋ぎ止めるようなことはできないから。

「ええ。お前の相手は私」

宣言して、駆け出した。

「つとに無茶苦茶するよなあ……。いやまあ、あいつの夢ならこんくらいやって当然か？ 斬り甲斐はありそうで何よりだが」

親父の夢の残骸も斬って、いよいよ自分くらいしか越えるものがなくなつたかとは正直思つてた。だからと言つて本当に対峙させてくるとは思わなかつたが。

「やっぱ最後にや斬れない相手は自分だけになるよな？ まあ、悪くない」

踏み込めばすぐ斬り合いが始まる程度の距離に、腹の立つ薄ら笑いを浮かべた俺の口ストメアがいる。数合剣を合わせれば、こいつは悪夢のかけらなんかじゃないことは理解できる。となれば自らの夢に剣を向けるのは二度目で、いつの間にか前回のことを吹っ切つていた自分に我ながら驚いた。

背後では既にコピシユが熾烈な斬り合いを繰り広げている。目の前のをさっさと片付けて加勢したいところだが、まったく同格の相手に迂闊に手を出す訳にはいかない。

周りの爆音やら何やらとは無縁の静かな戦場に、足音が響いた。まあ、あいつのロストメアだろう。そつちを斬りに行くか、と思考を巡らせる。距離を詰めればこちらの勝ち、近づけなければあちらの勝ち。俺と魔法使いの力量差はこんなもんだろう。

分の悪い賭けだが、試してみる価値はある。最悪、二人を引き付けて夜まで逃げれば門を潜られることもない。

「つらあー」

静止状態から一呼吸で剣を繰り出す。あちらからすれば予想外の行動だったのだろう、一瞬の硬直を見せた。にも関わらずそこから転がるようにして剣を潜られ、虚空を

切り裂いた。だが、とカットラスを突き出す。

二刀持ちの相手してるなら捨て身の回避はよくないぞ、と本人に次会ったら教えてやろうかと思つたところで、剣の軌道を円に変え、後ろからの剣閃に噛み合わせた。

「おいおい、自分を斬れるなんて機会、もう滅多にあるもんじゃねえぞ？ いいのか、そつちを斬りに行つて？」

「うるせえ。……そういう日もあんだよ」

「はっ、そうかよ」

押し込まれる前に強引にブロードソードを跳ね上げる。体を捻り氷の弾丸を避け、回転のまま蹴りを放つ。運よく命中、しかし追撃しようにも魔法の壁が既に出て上がっている。そのまま俺のロストメアが剣を振るってきた。

「ちつたあ加減しろ!？」

大丈夫、死にはしないからと笑う姿に、やつぱ夢は夢なんだな、と妙な感慨が湧いた。

乱れ飛ぶ炎、雷、氷に、磨き続けた剣の奥義。自分の剣を外から見るといい機会だとか考える暇もない。ただ至つた境地で捌き続けた。

しかしまあ……じりじりと追い詰められている。同格以上を二人相手にしているのだからむしろ善戦しているのではないだろうか。

カットラスに込めてあつた魔力が切れ、壁から吹き出した炎に刀身が歪む。慣れない重心でそのまま撃ち合い、当然ながら打ち負け、剣が手から弾き飛ばされていった。

そうなつても容赦のない攻撃の数々を、相手を盾にし街灯を盾にし、時に残つたブロードソードで切り払い、何とか避けていく。

いよいよ逃げに徹するか、と覚悟したが。

「剣なら、何だつたかしらねえ？」

「まだ斬られてないから負けてねえよ」

頼もしい援護射撃が墜ちてきた。

「魔法使いさんのロストメアはあたしが相手するから、自分の相手は自分でよろしくね」
「おう、悪いな。お前さんは自分の夢に苦戦しなかつたのか？」

答えず笑つてロストメアに銃を連射した姿に肩を竦めて、こちらも自分を斬りに行くことにした。

「やーつと追い付いた」

追い付かれるとは思つてなかつた、と惚けた言葉を口にする夢に、銃口を向ける。

「後でアフリト翁からも聞くつもりだけど……狙いは何？」

狙い？ 目的なら自分を叶えることだけ。そう言つてみせたのに、視線が泳いでい

るせいで嘘だと断定できてしまう。嘘に慣れていないのが丸わかりで、気が抜けそう
だ。

取り敢えず、邪魔をするなら容赦はしないってことで。そう言い放つてカードを構え
たロストメアに、先手必勝と銃弾を叩き込んだ。

正直なところ、魔法使いさんと戦って勝つのは難しい。ラギトやリフィルのような防
御を抜く一発、というものがない。今も銃弾が情けない音を立てて障壁に阻まれた。接
近しても、この刀では攻撃が通らないだろう。

けれど、幸い今は最高の弾丸を持っている。園人の魔方陣を破壊するために用意して
もらった弾丸、その残りだ。

刀と銃とで障壁に細かな傷をつけていく。そして、障壁が張り直された瞬間に合わ
せ、切り札を切った。

弾に触れた瞬間あつという間に砕ける魔法を他所に、残った銃弾を3連発。そのまま
一気に距離を詰め、回避したその夢に、刀を突き刺した。

明らかに避けられたタイミングだったのに、と思わず顔をしかめ、問い詰めてしまう。
手応えからしてこれが本体なのは間違いないから、罠だという不安もないのが余計に妙
だ。

「全然本気だしてないんじゃない？ こんな簡単に倒せる夢じゃないでしょ？」

いや、魔法使いにその弾丸はちよつと対処できないから。腹部に刃物を刺されているのにただ呆れたように言う夢は、それでも清々しい表情をしていた。

「作戦ももつと勝てるように作れた筈だし、もしかして負けるのが目的だったり？」

半分正解。勝てるなら勝つてたかな。夢だし。なんて曖昧な言葉に、質問を重ねる。「でも負けを選んだのよね？」

皆と「一緒に」生きるつてのは、誰かの夢を踏み台にしたら叶わないつてことだから。

その言葉に、昨日の夜を思い出す。

「あー、あたしのこれからつてのとあなたは確かに相容れないわね。だから素直に叶わないことを選んだ、と」

頷く夢は、端から消滅が始まっていた。

皆の夢も、自分が起点になってカードを媒介にロストメアとして喚び出したからそろそろ消えると思うよ。

それだけ言つて、後は満足と口を閉じてしまった夢に、ふと気になることを尋ねた。

「……ロストメアにとつて叶うことは生きることと同意義なのよね？」

そうだね、と答えが来る。

それだと、命よりもあたしの夢の障害にならないことを選んだ、なんて解釈もできて

しまうのだけど……。まあ、確かめなくてもいいだろう。

ああ、そういえば。まだ最後に聞きたいことがあった。

「魔法使いさんがあなたを諦めたのって何が切っ掛けだったのか、聞いちやつていい？」
この街にいらなくても、一緒にいきたくないくて、また会えるから。そう言つて、一息吐いた。

そつちが今の夢になったから、古い自分は叶わざる夢になったんだよ。そう言い終えた〈夢〉はもう殆どが消失していた。

「成る程ねえ……。それなら、別れの挨拶はさようならじゃなくつて……」
……またね。

お互い笑つて手を振つて、お別れした。

『聖界』

寂しがり女神と友人の話

「うう……。魔法使いさんに会いたい……」

図書館からこんには、聖女のリアラです。机の向こうで呻いているのは、こちらも聖女のクレティアです。

午後の聖女会議としやれこんでいたリアラとクレティアでしたが、話題が魔法使いさんに移った途端にクレティアが突然へにやりと机に突っ伏してしまいました。

これまでも会えない期間が長いとこんな症状が出ていましたが、今回は事情がちよつと違います。なぜなら――

「最近クレティアが猫さんを助けたあとにひよっこり来てくれたじゃないですか。それに、それまでは我慢できてましたよね？」

そう。ほんの二週間前に魔法使いさんが遊びに来てくれたばかりなのです。その前は数カ月会えなくても落ち着いていたのを考えると、ちよつと様子がおかしいです。

「いやー、そうなんだけどさ」

顔は机にのせたまま、元気をなくした声でクレティアは呟きました。

「魔法使いさんに次に会うのは、私がどこに出しても恥ずかしくない立派な聖女になつてからって思ってたんだよ……。それまでは我慢して、頑張ろうって」

「あー、だから頑張ってたのに、ご褒美が先に届いちゃったってことですね……」

「うん。会えてすつごく嬉しかったんだよ？ それは本当。でもですねー。会えないからこそ頑張れた、みたいなところもありまして」

顔を上げて寂しげに笑うクレティアをどう励まそうかと悩んでいると、後ろから怒り声が飛んできました。

「二人ともー？ そろそろ作業に戻ってくれない？」

何冊かの本を抱えたヒカリさんです。一番上のあれは……お菓子の本でしょうか？
「ずんずん歩いてきましたが、クレティアの表情を見て目を丸くしました。」

「つてあれ、どうしたの？ 全然元気ないけど、調子悪い？」

「それなら、部屋で休んだ方がいいんじゃないかしら」

そうこうしているとソラナさんまでやってきて、心配そうな顔をしています。変な形の石を眺め始めた本人に説明させるのもどうかと思うので、ここはリアラが事情を話しましょう。

「実はですね……」

「……というわけで、寂しいみたいです」

「ああ……体調が悪いわけじゃないのね」

そう言つてちよつぱり安心した顔のソラナさんとは違つて、ヒカリさんは難しい顔を崩しません。

「それは良かったんだけど……会えないつてだけでここまで調子落としてたつけ？ 他にも何かあるんじゃない？」

びくり、と肩を震わせたのが答えでした。それでも迷っている視線に、熱い目力をぶつけます。

「聖女が3人もいるんです！ 相談ならお任せです！」

「や、私も聖女なんですけどね……。まあ、1人で悩んでもダメだったし、聞いてもらうね」

「まずは……えつと、3人はさ、魔法使いさんの匂いつてわかる？ わかんない？」

「まあわかんないですよねー。ふつう、そんな嗅ぐようなことしないし。ソラナもそんな首振らなくつていいって」

「いい匂いなんだよ、すつごく。なんか、いろんな人の祝福？ 祈り？ が詰まってるんだよね。いっぱい縁と絆、それと魔力」

「あ、その辺はみんな匂いじやわからないんだっけ。まあそれは一旦置いておいて……」
「それで、魔法使いさんの匂いがき。エークノームにずっと残ってるんだよね。薄くだけど、今でもわかるくらい」

「来てくれたのは二週間も前だし、半日もしないうちにフラクタルに帰されちゃったはずなのに」

「まあ、そんなことが気になってたわけです。匂いの話が他の人にはあんまり伝わらなかったから、調査できなかつたんだけどね。たはは……」

匂いは心に強く影響を与える、というのをノインちゃんから偶然聞いていたリアラにとっては、見過ごせる話ではありません。

「だったら、匂いの出所を探しに行きましょう！ 原因がわかるだけでも、もやもやしなくなりますから！」

手伝いを申し出ましたが、クレティアは首を横に振りました。
「今は聖女のお仕事だよ？ そんなことしてちゃダメだっけ」

「いや、さつきまで呻くだけだったクレティアが言っても説得力がないです」

うっ、とわざとらしく胸を押さえたクレティアにとどめを刺すべく、頼れる先輩方に視線を向けます。

二人とも笑って頷き、立ち上がって話始めました。

「そうね……。もう残りは私だけでも何とかなる量だから、行ってきても大丈夫よ？」
「いやいや、流石に私も残るから。ソラナだけに仕事を押し付けるわけにはいかないって」

「ありがとう、ヒカリ。……という訳で、二人は行ってらっしゃい」

「えっ」

自然な流れで、いつの間にか廊下へと押し出されていました。連携プレイ、恐るべしです。

「それで、匂いでしたっけ」

「うん」

取り敢えずで歩きながら、クレティアから聞き取り調査を始めます。本人には気づけない大切な情報が得られるかもしれせん。

「どこが一番残ってる、とかありました？」

「実は図書館にも結構残ってたんだよね……」

「え、そうなんですか。じゃあ戻って図書館から調査を始めたほうがいいですか？」

「うーん？ 薄くなるだけだったから、あんまり手がかりにはならないと思う。後は厨房とか、どっちかっていうと、こーやって廊下とかで唐突……に……」

「クレティアア？　どうかしましたか？」

クレティアアが突然立ち止まり、鼻をすんすん鳴らしています。これはもしかして……。

「追いますか？」

「走るよ、リアアラ！」

「はい！」

クレティアアの背を追って走ります。広い建物の廊下を右左へと迷いなく突き進み駆け抜け……。

……とある部屋へとたどり着きました。しかし、お互いに困り顔で立ちすくみます。いくらなんでも、神様の部屋をこんな理由で訪ねてもいいのでしょうか……。

「ここつてさ……」

「はい、ですけど……ここまで来たんですし、行動あるのみです」

「そうだね。それじゃ、行きますか」

……目が覚めると君は、リタの私室にいた。ここ最近で随分と見慣れた部屋だ。君の感覚では二日ぶりといったところだろうか。

「あら、今日は来てくれたのね」

嬉しさを隠しきれないリタの声に、招待ありがとう、と手紙をヒラヒラと振って君は応える。ウサギの顔が描かれた、可愛らしさを感じるものだ。

いつかのように無理矢理呼び出されるのではなく、招待状がクエスニアリアスにいる君の手元に届くようになったのはここ二週間のことだ。初日に遊びに行つて以来殆ど毎日届くが、当然君にも用事はあるので断ることも多々ある。

今回は仕事を片付け暇ができたタイミングでこうして遊びに来ているため、ウイズはバロンで遊んで……もといバロンにお世話してもらっている。

「いちいちお礼なんていらぬわよ……。と、友達、だし、部屋でおしゃべりするくらい当たり前のことですよ？」

そう、君とリタは友達だ。

しかし、エークノームに来て、大抵時間がないためにゆっくり話すことはできなかった。リタは、その機会を用意するためにわざわざ招待状をしたためてくれたのだ。

それでも、感謝してるから、と正直に言つた君に、頬を少々赤くしたリタが逃げよう口を動かした。

「わ、わかつたから……。えっと、お菓子を持つてくるからちよつと待つてー！」

言うやいなや部屋を飛び出して行つたリタに呆氣にとられた君だが、偶にあることな

ので気にしないことにした。

リタを待つ間に、どんな話をしようかと君は考えることにした。

以前は異界の魔物をカードを見せながら紹介したが、一緒にいたプリフィカ含め中々に反応が良かったのを君は思い出した。

やはり、混沌の女神ともなるとああいっただ魔物に興味が惹かれるものなのだろうか。そう結論付け、君は前回は出さなかつた怪物たちのカードを用意し始めた。

カリユプスの腕、深淵の怪物たち、イグノビティウムの王……。並べたカードはただ見た目が凶悪だけでなく謎の圧力を感じる。

多分、これはダメなやつだ。君はカードをそつと懐に戻した。

やがてリタがお盆片手に鼻歌混じりで帰ってきて、君はお盆に乗ったクッキーに手を伸ばす。

「どう？ おいしいでしょ？」

君は深く頷いた。手間隙かけた味がする、と感想を述べると、花開くような笑顔が向けられた。

「実はこれ、ね……その……私が」

何か言いかけたリタの声を遮るように、ノックが響いた。君は目線で対応するのを勧

めるが、どちらにも動く前にドアが開いた。

『あれ？ 鍵かかってませんか？』

『本当だ』

聞き覚えのある声に、二人揃って苦笑した。お客を二人追加して、友人同士のおしゃべりは続く。

「あなたと二人で話す時間も楽しいけど、賑やかなのも悪くないわよね？」

……君も笑って頷いた。

「そういえばさ。お菓子作りの本ってもしかして、むががつ!？」

「クレティアー!?! 大丈夫ですか!?!」

「いたずらよいたずら。大丈夫よ、多分」

「多分ですか!?!」

……大騒ぎに君は笑うことしかできなかった。確かに、賑やかだ。

『光と闇が争い続ける異界』

現実現実エニグマ

愉快でエニグマな仲間たちに手を振って、バスに乗り込んだ君とウイズ。長いようで短い停泊時間も終わり、やがてバスはゆっくりと発車した。

空席が目立つ車内の、後ろの方に君は腰を下ろした。目立つ位置で発光するわけにもいかないだろうという配慮だ。

異界移動に備えウイズは君のローブの中へ、旅の荷物は膝に抱えて、君は車窓を眺めていることにした。

しかしバスはいつものバイト現場を通り、マジスクスポットも通りすぎ、名前だけ聞いた隣町も通り抜け……何事もなく、終点へと到着してしまった。

「——駅、こちらが終点となります。荷物をお忘れないように気をつけてお降りください」

君は、呼び掛けてくるアナウンスを呆然と聞いていた。サンフラワーの言葉が脳裏をよぎり、不安が膨れていくのを感じる。

周りがほとんど降車した頃に我に返り、君はため息をついて座席から立ち上がった。

心許ない残金のカードをスキャンして君はバスを降りた。クエスニアリアスの通貨が使えないのが辛い。ありがとうございましたと笑顔を向けてくる車掌に、君はなんとか微笑みを返した。

循環バスとはいえ、一周したら一旦乗り換えなければならぬらしい。次のバスまで凡そ10分、君はため息を着いた。折角の快晴も、どこか曇つて感じる。

「まあ、そんなこともあるにや……。何周か乗つていけば帰れるかもしれないにや」

前向きな師匠の言葉も、どこか上滑りしていた。一周しても何も起きなかつた時点で、多分駄目だろうなという予感をひしひしと感じているのはウイズも同じだろう。

それでも一縷の望みを賭けて、君とウイズはやつて来たバスへと乗り込んだ。

「あ、黒猫、お帰り！ ……つてあれ？」

居候先の花隈家へと君が帰つてきたのは日が傾き始めた頃だった。パタパタと若菜が出迎えてくれるが、君を見て首を傾げた。元の世界に帰る、と伝えて出発しただけに、当然の疑問だろう。

何周もバスに乗つても帰れなかつた旨を君が伝えると、そっか、と小さく呟いて、若菜は冷蔵庫から何かを取り出してきた。

「はい、若菜のチョコあげる！ 元氣だして！」

暖かい気遣いに君は感動した。ただバスに乗り続けるといふのは、思った以上に精神が疲弊するのだ。

「うんうん、疲れたーって顔してたから。そんなんじやマジスクもできないでしょ？」
それなら、食べ終わったらやろうか、と微笑んだ君に、とびつきりの笑顔が返ってきた。

もらったチョコを食べ終え、買い足したお茶の残りを飲み干せば、気持ちも前向きになつてくる。今やるべきは、全力でマジスクの相手をする事だろう。

「よっしゃー！ 今日こそ全勝！」

「レディ……」

スクラム！

「……うんうん、その手、罨だよね？」

……何だかんだと君はマジスクにかなり熱中している。殆ど勝てないとはいえ、若菜とそれなりに白熱した対戦ができるくらいにはなつたくらいであるから、相当のものだ。

「へっへーん！ 若菜の勝ち！」

とはいえ相手はチャンピオン、余程の幸運か彼女の集中力切れかでしか君が勝利したことはない。今もまた、本日4敗目を喫したところだ。

「……そろそろお姉ちゃんが帰ってくる時間だから、この一戦で最後ね」

「たっだいまー……」

君が若菜から通算3回目の勝利をもぎ取った頃、エニグマチェリー……：ハルコが帰ってきた。疲れを滲ませる声からして、今日もまた追試対策の勉強をしてきたのだろうか。

「あく負けた！ もう一回！ ……あ、お帰り」

張りのない声と同様に気の抜けた顔でリビングへ入ってきたハルコは、君を見てへにやりと眉を下げた。

「うん、ただいま。……んで、黒猫つちは帰れなかった感じ？ 大変だね」

またお世話になります、と苦笑いを浮かべる君に、

「ま、実家だと思つて寛いでくれていいよ」

と、ハルコは相変わらずの姉御肌を見せつけた。善意につけこんでいるようで君の心が痛むが、本格的にいつ帰ることができのかわからなくなった今、頼るしかないのが

歯痒い。

花隈家を始めたささまざまな厚意により君の生活は成り立っている。食、住とハルコに面倒を見てもらい、衣服はローブ姿を見かねたハカマダが貸してくれたものをありがたく着ている。

しかしそれでも外食だったり移動だったり、何だかんだお金は減っていくもので、カードの残金は元の1割を切っていた。この異界に移動する直前に手持ちのカードの整理、換金を行ったのが非常に悔やまれる。

一日をバスで過ごした翌日、君はいもびーに会いに会社を訪れていた。昨日のうちに連絡はつけておいたので、大して待たされることもなく応接室へと通される。

神都での勤務先とどこか似通った空気を感じるオフィスは、この世界では一般的なものらしい。手触りのいいソファアーに腰かけて、君は話を始めた。

ひとまず帰る手段のあてがなくなったこと、それに伴いまたサポートメンバーとして働くことを伝える。

「中々に難儀だね……。復職の件は問題ないよ。こちらとしても大歓迎だからね」

ひとまずの懸念が消えて、君はほっと一息ついた。その後、慎重に本題を切り出す。

「君のバイト代？」

そう。君はエニグマのサポートメンバーとして契約し、働いていたはずだ。しかし、その代金を受け取った記憶がない。

「うちの会社は、月末に纏めて賃金を振り込む方式だからね。一週間後に受け取れるよ」「昨日帰られてたら賃金未払いになるところだったでもす。怪我の功名でもす」

「そういえば契約のときにそんな感じのことが書類に記載されていた気もする。それはそれとして、一週間。その間は今の残金で過ごすことを強いられるわけだ。」「バス代で全部なくなるんじゃないかにゃ?」

ウイズの言う通り、恐らくあと数回のバス移動でカードの中身が空になる。とはいえ、お金を借りるのは最終手段だ、と君は考えている。まだその時ではない。

「かっつかつでもすね……」

「うーん……。ああ、そういえば前に原付に興味あるって言ってたよね?」

確かに、以前乗せてもらって以来、興味を持っていた。しかし今聞かれる理由がわからず、君は疑問符を浮かべた。

「いや、当部門にもう一人足が欲しくてね。サポートメンバーで自由に動ける人間ってのはあまりいないんだよ。それに、免許つてのは身分証明書としても便利だからね……。悪くないんじゃないかな」

三日後、君は小型バイク（ゲンツキ……原付とは似て非なるものだ）の免許を取得した。戸籍も学費もいつの間にか用意されていることに困惑したが、いもぴーが何とかしたということでも納得できてしまうのがエニグマだ。

出来る限り教習を詰め込めれば二日で試験を終えることも可能らしいが、出勤の関係上それは無理だった。

「ヒマリには感謝しないといけないにや」

この異界では一般常識からして危うい君が試験に合格できたのは、エニグマサンフラワーことヒマリが勉強に手を貸してくれたからだ。

「へえ、バイクに乗る魔法使い……。いいじゃんいいじゃん、リアル路線で。勉強が不安？ いーよ、あたしが教えるよ」

このことで、想像以上に親身になって協力してもらえた。……リアルとは何なのかは、未だに聞けていない。

免許取得の翌日、いもぴーから社用車として受け取ったバイクを駆って、君はバイト先へと出掛けている。

……後ろにヒマリを乗せて。

出発時にハルコとウイズがバスに乗るのを見送っていたら、突然ヒマリが降車してき

たのにはかなり驚いた。バイクに乗りたかったというのはわからないでもないが、遅刻のリスクを恐れない胆力はかなりのもだろう。

「おお。この疾走感は原チャジャちよつと出せないな。もつと飛ばせる？」

背中越しに聞こえる楽しげな声に、まだ二人乗りは違反だとか制限速度をかなりオーバーしているだとか苦言を呈しなくなった君だが、彼女に関しては今さらかと思ひ直して無言を貫いた。

「あ、次の交差点で右ね」

実のところ、君に土地勘がまったくないために、彼女の案内はかなり助かっていた。バス移動ではあまり道を覚えることができななのだ。

「ナビ」という機械が地図がわりになるといふのを聞いたことがあるが、生憎このバイクには装備されていなかった。

「そのコンビニに停めて……はい、ご苦労」

教習でない初めての運転、しかも二人乗り。君はかなりの疲労感を感じていた。無意識にバイクをカードの中に仕舞おうと動いているくらいなので相当だ。慌ててカードを懐に戻す。

「んじゃ、バイトに行きますか。送迎のお礼ってことで、帰りにアイスでも奢ったげるよ」

べしりと気安く君の肩を叩き、にかりと笑うヒマリ。アイスという単語に釣られてやる気を出す自分の単純さに苦笑いして、君も歩き出した。

現場までは3分も歩けば到着するような距離で、バイク通勤も悪くないと君は深く頷いた。通勤時間の合計はかなり短くなるのだ。

バス組はそれから15分ほどして到着した。ハルコからウイズを受けとり、予定時間まで雑談で過ごす。

「おお、早いなお前ら。一本前のバスで来たのか?」

これから戦う相手との会話がそれでいいのだろうか。何度か目の疑問が過るが努めて無視して、君はバイク通勤を始めたことを伝えた。

「ほお、バイク通勤か。……よく免許とれたな。異世界出身だったよな、君?」

「今、異世界転生の話しました?」

「いや違う……違わないのか? いや、違うだろう。違うぞ」

「隠さないでいいんですよハカマダさぁん……。誰しもチートで無双するのを妄想したことはあるはずですから」

「だから違うって!」

話が有耶無耶になっているうちに時間が来て、いつも通り戦闘が始まった。いもぴー

の闇に触れる前に話がかわって、君は安心した。

ゴシヨガワラやオノウエが転職したが、まだ人材補充はされていないようで新規怪人などは特に出てこず、戦いはエニグマフラワーズの勝利に終わった。

「お疲れ」様です」

さつくりと解散し、帰宅する運びとなった。君の金欠はどうやら皆に知れ渡っているらしく、どこかによって帰ろうとは誰も言い出さなかった。

君はありがたいとは思ったが、ひどく複雑な気分になった。いやに寒さが身に沁みる。

……それはさておきウイズはハルコに預け、君はヒマリと帰路についた。

「好きなやつ選んでいいよ。このナポリタン味のとかどう？ アホみたいに安いけど」

ナポリタンとやらが何なのかを君は知らなかったがひとまず拒否して、洋梨味を手にとった。

「それ？ オツケー。あたしは……こいつにチャレンジしてみつかないかな」

改めてパッケージを見るにパスタ味のアイスのようだが……。まあ、食べたいと言うならあえて止める必要もないか、と君は諦めた。

「あざっしたー」

やる気のない挨拶を背に買い物を終え店から出ると思わぬ寒さで、君はぶるりと震えた。

他にも買うものがあるとのことと先に出てきてしまったが、店内で待つていた方が良かったかもしれない……。

などと考えてくる内に買い物を終え出てきたヒマリは袋からアイスを取り出し、君に差し出す。

「ほい」

今さらだが今日のような冷え込む日にアイスは合わないのでは？ 感謝して受け取りながらもそんなことを君が考えていると、表情からそれを察したのか、笑われた。

「あえて寒いからアイス。それがいいんじゃないん」

そう言って、ヒマリはナポリタン味のアイスの封を切った。まったくわからない思想だったが、君もそれに倣って食べ始めることにした。

「うわまつず！ ええ……何これ。一周回って逆にリアルだわ」

顔をひきつらせるヒマリの横で、君は寒さに震えていた。美味しいことは美味しいが、やっぱり寒いじゃないかと呪詛を吐くも、スルーされる。

「流石にこれ完食は無理だな……。ちよつとこつち向いて」

振り向いた君の口に、暴力的な味が突つ込まれた。冷……。甘……。トマト……。？ 反射で吐き出しそうになるのをこらえ、齧り取ったぶんを飲み込む。

「いやーアイスを二つも奢つちやうとか、あたし太つ腹過ぎない？」

けらけら笑うヒマリに君はじつとりした視線を送るも、意にも介されない。捨てるには忍びないので食べ進めるが、冷たさと味で口内の感覚が消えてきた。

「あたしは別に気にしないから、無理だったら捨ててきなよ」

笑い顔から一転してこちらを心配する顔に、むしろ君は笑ってしまった。口から棒を取り出し、食べ終えたことを見せつける。

「うっわよく食べきつたな……。うん、完食記念にこいつをやるう」

ひよいと投げられたペットボトルには温かいコーヒーが入っていて、冷えきつた君の手にじんわりとした熱を伝えた。

キャップを開けて一口飲むと、苦味と熱で体の芯から温められた気分になり、君は思わずほう、と息を吐く。

「寒い日のアイスのよき、わかつたつしよ？」

したり顔のヒマリに、君は素直に頷いた。

その後、君はバイクでヒマリを自宅まで送り届けた。彼女の自宅から花隈家に行くのにはそれほど複雑な道を通るわけではないというのを知っていたからこそできた行動だ。

別にいいよとは言われたが、送迎の報酬としてアイスを受け取ったから、と君が言い返せばまあいいけどさ、とあっさり引き下がった。

君は車庫の隅にバイクを止め、少しばかり雑談してから帰ることを決めた。

「わりと運転は丁寧だよね。まあまだ危なっかしいところはあるから、素人との2ケツとかウイズを乗せるとかは慣れてからのがいいと思うけど」

それなりに運転に慣れた目線からの意見は貴重なものだ。君は休みの日は運転の習熟に力を入れることにした。

「おつ、どっか出掛ける？ そんならちよつと付き合つてほしいんだけど」

元々バイト以外に予定はないので、君は快く了承した。その上で、何をするのか尋ねる。

「ちよつと最近体が鈍ってきたから、市営の体育館で運動しようと思つて。寒いとあんま動かなくなるんだよね」

軽く言われたが、重大な何かを隠しているように君には見えた。加えて何かを期待されているようにも。

「あんたは、バスケットやってやったことある？」

『古の書物に残る、どこか遠くにある異界』

八百八町〜つれづれ〜 春の豪華3本立すべしやる!

いろいろと忙しかった。冬の盆踊り祭り”の翌日、まだ朝早い気分屋で。

布団にくるまり眠っていた君は、顔を撫でる冷風で目を覚ました。

誰かが戸を開けたのだろうか。いや、昨日はみんな閉め忘れて開け放しだったのかもしれない……。そんな半覚醒状態の君の思考は、再び吹き付けた風に叩き起こされた。

眠気は寒気に飛ばされてしまったようで、そのまま二度寝を決め込むこともできない。仕方なく足元のウイズを起こさないようにそつと布団から抜け出し、君はローブを羽織った。

「やつぱこの格好じゃ寒いな……。上着上着……」

玄関に向かった君が目にしたのは、何事かを呟いているアカリの姿だった。微かに震えているところを見ると、外から帰ってきたところだろうか？

ひとまず君はおはようと挨拶した。アカリは驚いた様子でこちらを向いたが、君だとわかるとそのまま挨拶を返してきた。

「あれ……？ おはよう、トモ。もう起きたの？ あ……もしかして、起こしちやった？」

申し訳なさそうな顔だ。そこに正直に答えるのも憚られるわけで、君は話をそらすことにした。何処かへ行っていたのかと質問することで、相手の質問をやり過ぎしてみる。

「ううん、まだこれから出掛けようと思つてたところ。外に出てみたら、厚着しないと耐えられない寒さだったから」

こんな時間に何をしに外出するのだろうか。疑問は増えたが後で聞くことにして、君はひとまず厚着することを勧めた。

「うん、そうする。……それでさ、トモ、よかつたらなんだけど……本当によかつたらでいいんだけど……」

やけに長い前置きに、嫌な予感がした。……いつかにアヤツグに貸したお金が、即座に博打に突つままれたのを思い出す。結局別件で得た大金から返済されたとはいえ、さすがの君も呆れ果てた。

アヤツグはともかく。アカリはそんな人間ではないし、そんなことを頼まれる状況ではないのを君も当然わかつてはいる。

君はわずかに身構え、本題を待った。うつすら消えない微妙な警戒心ゆえの、特に意

味のない行動だ。

「……散歩に、付き合ってもらえないかな？」

そんな心中だけに、思っていた何倍も軽いお願いに君が即座に頷いてしまったのも仕方のないことだろう。頷いた後で、寒いし眠いのでは？ と君は後悔した。

「わ、やった。ちよつと待ってて」

嬉しそうなアカリに、やっぱ二度寝したいからごめん、などと言えるはずもなく、君はこの寒空の下を歩く覚悟を決めた。

「お祭りの後って、ハレの気に押されて縮まつた禍魂がひよつこり出てくることもあるの。だから今のうちに祓っておきたいなって」

まだ薄暗い町を、アカリの話に相づちを打ちながらも君はゆつくりと歩く。吐く息は白いが、厚着してきたお陰で寒さは思ったほどではない。

昨日の大騒ぎが嘘のような静寂の中で、置かれたままの屋台と幟だけが祭りの気配を残していた。他に出歩く人は当然おらず、二人分の音だけが響いている。

それにしても、こんな早朝から見廻りとは、と君は感心した。誰に強制されたわけでもない、報酬が出るわけでもない。そんな行動をここまで貫き通せるのは、奉仕の心をモットーとする君から見ても中々に真似できない行動だ。

「あはは……。そう言ってもらえるのは嬉しいんだけど、今言ったのは建前なんだよね。祓うのは昨晚で終わっちゃってるし」

くすぐったそうに笑って、アカリはそう言った。建前だというのなら、本音は別にあるということ。それは何なのか、君は尋ねた。

「この時間なら、まだ片付けも始まってないから。お祭りの風情を感じるのに丁度いいかなって……」

お祭りは参加してこそでは、と首をかしげた君を見て、アカリは苦笑いして言葉を止めた。

「トモは異界から来たのにお祭り慣れしてるよね……。ちよつと、羨ましいかも。知り合いとか友達とかがその場にいなくても、そこにお祭りがあれば飛び込んでいけそう」
流石にそれほどノリと勢いは持ち合わせていない……と反論しようとした君は、初めて訪れた異界で「グリモワールグランプリ」だったり「喧嘩神輿トーナメント」だったりに参加していたことに気付き口を閉じた。きつかけは巻き込まれとはいえ、最後まで付き合ったらそれは立派な参加者だろう。

「私は……一緒に出かける友達もいなかったから。みんなでわいわいしてる中で、自分だけ一人だと、ちよつと寂しいよね。だからこうやって、余韻だけでも味わってた……」

前はそうでも、今回は違ったんじゃない、と君は尋ねた。途中でワンオペにさせてしまったら、最後に四天王との戦いがあったりはした。けれど確かに彼女はお祭りの参加者で、一人ではなかったはずだ。

「うん。そう、だね。皆といて、すつごく楽しかった。……だから今も、トモを誘ってみようって思ったのかも」

それは何よりと頷いて、君はお祭りの感想を聞くことにした。

「改めてどう、かあ……」

考え込んだアカリを眺めていると、遠くで夜明けを知らせる鐘の音が鳴り響いた。いつの間にか白んだ空は、透き通るように晴れ渡っている。

いい日になりそうだと大きく伸びをした君を脇目に、顔をあげたアカリは歩いてきた道に振り向いた。

帰るのか、と問いかけた君に、アカリは首を横に振る。

「ううん、そうじゃなくて……」

つ、と彼女の白魚のような指が、お祭りの残滓を一つずつ辿っていく。

「この屋台はお面、だったよね」

ヨミチが狐のお面を買っていったこの屋台は、今は奇妙な口をした男のお面だけが風に揺れていた。おどけた顔が孤独に揺れる様は、奇妙な寂寥感を君に与えてくる。

それについて何か言うわけでもないアカリは、順番にそれぞれの屋台が何を売っていたか、思い返しているようだ。

「それで、こつちがりんご飴、そこはわた菓子であつちは金魚すくい……」

むこうに鍋のお店もあつたね、と君も記憶を辿る。気分屋が魚介が味の主軸だったのに対し、あちらの屋台では豆腐の魅力を引き出すさつぱりとした味付けだった。

気分屋のお鍋は美味しい。それは自信を持って言える。が、それでも甲乙つけがたい完成度のお鍋だった……と君は語った。

……これでは師匠を食いしん坊だと笑えないような気がする。いや、むしろ師匠の食欲がうつつたのだらう。きつと。

「へえ……い。鍋は気分屋で食べるからって思って他の屋台は気にしてなかったけど……。トモがそんな鍋顔になるくらい美味しいんだね」

どうやら思い出すうちに鍋欲が顔に出ていたらしく、君は少々気恥ずかしさを覚えただ。帰ったら、昨晩の残りの鍋を食すことに決め、話の続きを促す。

「来年もその屋台がやってたら……食べてみようかな」

来年はこの時期にお祭りをやるのかな、と君はちよつぱり無粋な疑問を投げ掛けた。ミコトの偉業でハレとケの周期が乱れたのが原因らしいが、そういつたことは毎年起こるのだろうか？

「あ、そつか。今年が特別だったただけだもんね。……でも、あれだけたくさんの人が大騒ぎして楽しんだんだから。盆げーとうえいが開かなくても、冬の盆踊り祭りはまた開催されるんじゃないかな」

アカリの言葉の節々から感じるものがあり、もしかして、と君は尋ねた。次のお祭り、かなり楽しみになってる？

「うん。人混みが辛いなのは変わらないけど……。どんなお店があつてどう楽しむか、そういうのを考えるのはわくわくする。今までどんな屋台があるかは想像とだいぶ前の記憶が頼りだったけど、昨日のお祭りでちゃんと色がついたから」

そんな折角の機会に、店番を任せきりにさせてしまったという罪悪感が君の胸をつつく。そんな君に、アカリは困ったように笑った。

「私がやるって言ったことなんだから、そんなに気にしなくていいと思う。ヨミチに楽しんでもらうのも大事なことだったし……」

それでも何かこう……むずむずしてしまふ。君は、借りはできる限り返す主義なのだ。

君のそのこだわりはアカリに伝わったようで、悩みはじめてしまった。我ながら面倒な性分をしているな、と君は少しばかり反省をする。

「だったら……えっと、次のお祭り、一緒に、回ってくれないかな……? なんてね。別

に断つ」

それならお安いご用だ。君は小さく呟かれたお願いに、力強く頷き返す。

しかし、なぜか提案した側のアカリが申し訳なさそうな顔をしている。

「でも……。トモは異界の人だから次のお祭りの時にいるかわからないし、そもそも次のお祭りがいつやるかもわからないし、多分私みたいなのと回つてもあんまり楽しくないと思うし……」

大丈夫。

君はそう言つてアカリのねがていぶな発言を遮つた。適当な励ましではなく、明確な根拠がある時の大丈夫、だ。

「え、でも……。異界からいつ飛ばされるかはわからないって……」

その通り。君が自ら望んで異界に行くということはほぼ不可能だ。そう、君から移動することは。

でも、今の都には、ミコトがいる。

「いやいやいやトモ、確かにあの人なら異界移動くらいできるかもしれないけど、そんなおいそれと足に使えるような人じゃないと思うな！ あ、でも知り合いっほい感じだったよね。猫神様関連の知り合いだったりするの？」

その反応で君は、ミコトがどこか遠い存在であるように感じた。そうだ。彼女はもう偉業をなした英雄で、君が気軽に手を引いて祭りに繰り出せるような存在ではないのかもしれない。

過去を語って聞かせるのはやめて、質問にはちよつとした知り合いだと答えた。

それなりの親しさであることを話したとして。ミコトに思うところはないとしても、周りはどう考え動くか。旅を途中までしか知らない君では、何も言えない。

それでも、もう一度会いに行こうと思った。誤字はしなくなつても、神から人、人から神へと変わつても、きつと結んだ縁は消えていない。

『『祭りね』と、君は私の手を引いて——』

……都合のいい解釈だ。でも、この句が使われたことに意味はあると、君は思った。「……ちよつとした知り合い、かあ。そんな関係性で頼み事とかできるのかな」

君は曖昧に頷いて、そろそろ帰ろうと持ちかけた。周りの店はもう営業が始まり、通りに人も増えている。

「あ、そうだね。長々と付き合わせちゃつてごめん」

楽しかったから謝らないで、と君が返すと控えめな笑顔を向けられた。

君たちが気分屋に帰つてきたのは、朝食の真つ最中だった。いい香りに君の腹は限界

寸前だ。

「おう、朝帰りかお供とアカリ。止めはしないがほどほどにしとけよ？」

「痴れ者ね」

「ええ……？」

肘で君をつついて冗談を飛ばしてくるアヤツグとぼつきり切つて捨てたヨミチ。アカリは慣れていないのかオロオロとしている。見かねたウイズがアヤツグに爪を立てた。

「いでででっ！ ちょっと猫神!？」

「うちの弟子は純真にや！ あんまり変なことを吹き込まないでほしいにや！」

「だあわかつたわかつた冗談だから！ お供もそんなくらいわかつてんだろ？ なあ

……」

喧騒をよそに、さつさと食事を始めた君は口いっぱいにご飯を頬張っていた。散歩のおかげか、食欲が止まらない。

「お供の方、漬物いりますか？」

ありがとう、と器を受け取り、君は箸を再び進め始めた。

……アヤツグもウイズも、一連の動作を見て気が抜けたようだ。

「めつちや食つてんな……」

「キミはそのままできてほしいにや」

「いやまあ色気より食い気つて感じだよな。……猫神のお供だし」

「それはどういう意味なのかにや?」

折角落ち着きかけた空気に、再び火がつく。既に食事を終えていたミオとイヨリがツツコミを入れに立ち上がった。

「アヤツグさん!」

「どーして猫神には微妙に当たりが強いのよアヤツグ!」

「これはあれだな! 好きな子にはちよつかいをかけたくなるというあれだ! 意外な組み合わせが恋愛に発展する……。いいじゃないか」

「意外も意外ですけど……。あ、でも、魔学舎にも結構そういうことはあったので、そういうものなのかもしれませんね」

「なんだろう……。違うと思うんだけど言い出せないこの空気……」

混沌とした空気の中、君は食事を終えた。とんでもない事態になっているが、恋愛脳な必中神が悪い。というわけで君は、熱いお茶をすすって正気を保っている。冷静に考えればいいのだ。冷静に。

師匠はへそを曲げて君の横で丸くなっていた。これは後でご機嫌を取らねば、と苦笑が浮かぶ。

「いや違うつてお前ら！ そんな操られたわけでもねえんだからそんな動物に恋なんてしないつて！」

「狸も!？」

「そんな照れ隠ししては、叶う恋も叶わなくなってしまうぞ？ さあもつと攻めろ。なんなら告白までしてしまえ！」

「やかましい！……お供お前、随分優雅に茶あ飲んでんなあ？」

イヨリやら憑依したマトイやらに詰め寄せられたアヤツグの目が、君を捉えた。何かを呟いたようだが、君には聞こえなかった。ただ、嫌な予感がする……。

「ああ、わかった。俺も覚悟を決める」

そう言うときアヤツグは、真剣な顔になった。そうなると、囁きたてていた周囲もいきなり静かになる。いわゆる本当にやるとは思わなかった、というやつだ。

ウイズは跳ね起きて、ふしやー！ と威嚇音を鳴らしている。

「え、え、本気なの……?」

アヤツグは、ゆつくりとこちらを向いた。君を挟んだところにいるウイズを向いているのだろう。どうこうとした君は、ウイズの爪でその場に固定された。弟子を盾代わりに

使うのは止めてほしい。

覚悟を決めた顔つきは、一切の誤魔化しを許さないかのような圧があった。思わず君はごくりとつばを飲み込む。

そしてアヤツグは――

がぼり、と君に頭を下げた。

「頼む! 猫神じゃなくて、俺のお供になってくれ」

へ?

「は?」

「――弟子の引き抜きは許さないにや!」

……ウイズの鋭い爪が冴え渡っていた。

痛みでのたうち回るアヤツグに回復魔法をかけ終え、それから君は丁重にお断りの旨を伝えた。話を有耶無耶にするための冗談とか狂言とかそういうものだろう、というのはわかってはいたが、念の為だ。

それを聞いたアヤツグは、少し寂しげな笑いを見せた。

「だろうな。それはわかっちゃいるんだが……。気が変わったらいつでも言ってくれ。」

鍋ならいつでも食わせてやるぞ？」

それは中々魅力的……と心揺れる君は、ウイズに後ろから叩かれた。爪が出ないあたり、やりすぎたという自覚はあるのだろうか。

「まったく、ここまで食いしん坊になったのは、誰の影響なのかにや？ シューラとかリフィルとかかにや？」

ウイズの影響だと思うよ。君は間髪入れず答えた。

「にや!？」

「ははっ！ そりや違いねえ」

「もう一回わからせないといけないかにや？」

「待って、待ってくれて！」

どうにもウイズの沸点が低いのは、アヤツグが君を勧誘しようとしている気配を察知していたからのようだ。とはいえ、まだ小競り合いも微笑ましいの域を出ないものだが。

「そ、ういえばお供、朝は何をしてたんだ？」

急カーブな話の転換に、君も乗ってあげることにした。……再び回復魔法をくだらない負傷に使うのは面倒だったのだ。

「ほお、お祭りの跡を楽しんだ、と。いいねえ、なかなか風流じゃねえか」

ぼんと手を打ったアヤツグに対し、ウイズは食事のない屋台を眺めることにはあまり関心がないようだ。

一方、金魚に餌をやっていたヨミチは、君に詰め寄ってきた。

「お供は痴れ者、いえ、痴れれれ者ね」

何か気に触ったのだろうか。思い当たることのない君は素直に尋ねた。

「別に楽しみたいわけじゃないけど、祭りの最初から最後まで実態調査して楽しみたいって最初から言ってるじゃない。なのに最後にそんな粹なことがあるのを黙っておくなんて……」

いや、自分はアカリから誘われただけで、その楽しみ方はそこで知ったんだし……と反論する君の手をがごと掴み、見た目に反する膂力でヨミチは、君を引つ張り始めた。

「いいから付き合いなさい、お供。まだ間に合うかもしれない。実態調査に行くわよ」

抵抗を諦めた君からウイズが飛び降りた。巻き添えはごめんだにや、と顔で訴えかけてきている。

「行つてらっしゃいにやー」

なんだかんだ言つたとはいえ、ヨミチを案内することに不満があるわけでは勿論ない。

昨日は帰りそびれたとはいえ、いつかは黄泉に帰る彼女にできる限りの思い出を残すのも、とても大切なことだ。

掴まれた手を握るように持ち替え、君とヨミチは八百八町を歩きはじめた。

『未曾有の大災害が起きて地上のほとんどが結晶化した
異界』

うっかり共鳴クロスディライブ

地表が結晶で覆われた異界——つまるところクラックハンド隊のみんながいる異界。そこへ君が飛ばされたのは、これで都合3回目だ。

幸いなことにディブレイクの引き起こした事件の後は概ね平和が続いていたらしく、君はエニイと克蘭のお世話係に任命された。この異界に限らず、戦力として必要とされがちな君だが、その必要がないというのは喜ばしいことだ。

最初はオールドワン関連の事件の真っ只中、二度目はスラムで克蘭に出会い、いずれも大きな事件の渦中に放り出されてきた君は、3度目にして訪れたこの数日間の平和を存分に満喫していた。

基本はエニイや克蘭と買い物に行ったり遊んだり昼寝したりだが、ときにはウイジェットに異界の友人の話をしたり、グリットから仕事の愚痴を聞かされたり。

「逆に不安になるくらい平和にや……」

最近はエニイの耳攻撃から逃れるためにミステイハイドやレリツシユと行動するようになったウイズは、そうこぼした。

すでにここに来て5日目の夜だが、エニイが出張らなくてはならないような事件は一つも起きていない。一応駆けつけはしても、到着する前に解決されているようなことが殆どだ。

気持ちをはわかるが平和なのはいいことだ、と呑気に構える君。ウイズはそれに不満を覚えたらしく、てしてしと前脚で君を叩く。

「何か起きないとクエスⅡアリアスに帰れないんじゃないかにや？」

そうかもね、と君は答えた。それでも君は、この生活を変えるつもりはあまりない。どうせこの後なにか起きるんだろうと悟りを開いているが故の、今を楽しもうという刹那主義的な考えだ。

「それもそうにや。どうせいつか巻き込まれるなら、平和なうちは楽しんだ方がお得にや」

事件に巻き込まれて、みんなと解決すれば帰る。その流れはきつと変わらないだろう。

エニイもクランもこの時代に馴染んでいるみたいだし、自分の出る幕は戦闘くらいではなからうか。ちよつとだけ寂しく思いつつも、君はそう考えていた。

……エニイは悩みを抱えていた。

ソファに沈み込んで唸っている姿は、これまでに誰も見たことがないものだ。

帰ってきたときにはいたっていつも通りで、病気や怪我ではないことは定例のレゾネイターデータを実体化させるための端末。同様の機能を持つディライバーとの違いは、超古代のものである点。の調査のついでで判明している。ということは精神面が不調であると推測されるのだが、実際のところはエニイ本人にしかわからない。

ただ、医者でもある本業は忍者である。ミステイハイドはこの事態をさほど悪いようには思っていないかった。

元々は人間味が感じられないほどに希薄だったエニイの感情は、様々な経験と共に色付いてきている。この状況は、悩むことができるまでに成長した証だ、と言い換えることもできるのだ。

だからミステイハイドは、いつでも手を差し出せる場所から見守ることにした。ほどの距離に控えているのも、忍者らしくていいじゃないかと嘯きながら。

まあ、黙っていても過保護な「家族」が我慢できずに動き出すのを知っていた、とい

うのもあるのだが。

……予想されていた通りに、我慢できなかったグリットはソファから動かない愛娘グリット本人は認めていないに、慎重に声をかけた。

「どうしたエニイ？ 何かあったのか？」

「……んー」

「おーい、エニイ？ ……おーい？」

肯定とも否定ともとれない曖昧な返事を返しはしたが、エニイがソファから浮上することはなかった。何かあればすぐに話してくれていた娘のその態度に、グリットは打ちひしがれる。

そろそろ子離れの準備をさせたほうがいいのかもかもしれない。ミステイハイドは脳内のメモ帳に親バカ矯正、と書き込んだ。

「悩みがあるなら相談に乗るぞ。私にできることがあるなら手伝うし。取り敢えず起きなよ」

「うん……」

クランが心配そうに声をかけて、それでようやくエニイはソファから起き出した。しかし、それでもまだ口を開かない。

「あー、私たちには話しづらいことか？ だったらウイズとか魔法使いとかに……」
……と、そこで。エニイの身体がビクリと跳ねた。なるほど、魔法使いという単語に反応を示した、と。微笑ましい話になりそうだと予感して、良識ある大人たちはこっそり部屋から退出し始めた。

グリットは部屋に残ろうとしたが、レリツシユに促されて渋々と出ていく。克蘭は、エニイの隣に座ることにした。

「魔法使いに何かされたのか、エニイ？」

「ううん、違う。うん、ちゃんと話した方がいい、かな。えつとね……」

観念したのか、エニイがたどたどしくも語り始めたそれは、純粹かつどうしようもないことだ。

「魔法使いは、うーんと、なんて言えばいいのかな……。外側に、いようとしてるから？」

それが……わからないけど、何か嫌」

克蘭にも、身に覚えのあることだった。

ここ数日を思い返せば、何を買うにも、何を話すにも、一緒に楽しんでるのは本当だつてのはわかる。ちよつとズルい判断方法だけど、共鳴レゾネイターだけが持つている機能。感情や思考などのデータを他人に送るだけでなく、情報の強度を増すことさえ

できる。した感情で嘘はつけない。

ただ、ふとした瞬間。例えば私が楽しそうにすると、会話の輪からそつと出ていく。そして、ちよつと離れたところで、嬉しそうに笑うんだよ。

克蘭が／エニイが。この世界シエル

で楽しく暮らせているみたいでよかつたつて。

最初は、正直戸惑った。氣遣われているのは嬉しかったけど、でもなんでわざわざ遠ざかっていくのかわからなかつたから。

それから数日かけて、段々理由を察せるようになってきたら、腹が立った。

魔法使いにとって、自分自身はいつか居なくなる異物でしかない。だから、同じく異物になり得た私たちがそうでなくなつたことを喜ぶし、いつか居なくなる人間との関わりよりも一緒に生きていく相手との関わりを優先させようとする。

……私はそんなこと、望んでないのに——！

怒りのままに立ち上がった私は、同時に立ち上がった私にぶつかった。

「あ、悪い。エニイ」

謝つたら、一気に頭が冷えた。思考の共鳴も、多分そのタイミングで切れたと思う。

「大丈夫。だけど、やっぱりこうなっちゃった……」

「共鳴、してたのか」

心で燻っていただけのモヤモヤが、同じ思いと共鳴して増幅されて、我慢できないほどの激情になる。今起きたのは、多分そういうことだ。

ゆっくり息を吸って吐いて、思考がクリアなことを確かめる。私の脳は機械じゃないと、そう言い聞かせて精神を守ってきた時期の名残だけど、他の場面でも結構役に立つ。

うん、大丈夫だ。

「それじゃ、私からみんなに話せばいいか？ エニイからだとまた共鳴しちゃうだろうし」

「うん、お願い。……魔法使いには、内緒で」

「そうだな、そうするよ」

さっきの共鳴で伝わっていないかが不安だけど……。繋がった感覚はなかったから、心配しなくてもいいかな。

そんなこんなでその後はちよつとした準備をして、その翌日。私とグリットはエニイを送り出した。正直言つて、うまくいくとはあんまり思えない作戦だけど、エニイは乗り気だったからいいのかな。

猫耳を着けて楽しげに歩いていくエニイをぼんやりと見つめていると、グリットが声

をかけてきた。

「クランは一緒に行かなくてよかったのか？」

「私は後でいいや。二人で行くと流石に負担がすごそうだし。だったらエニイが行くべきだと思っよう」

「ああ、後でクランも行くのは確定してるんだな……」

呆れた声に、当り前だと笑って返して部屋を出た。

今日は何をしようかな。エニイと離れて過ごすのは久しぶりで、ちよつぴり複雑だけど。

「あ、ミステイハイド、忍者飯講座アセンシブ社にて不定期開催！ 興味のある方は、受付までどうぞ！ なんてやってるのか……。うんまあ、行ってみようかな」

頼れる仲間がたくさん増えた。だから、今日を楽しむことだってできる……はず。

「おはようございます。猫です」

君の部屋に、猫を自称するエニイがやってきた。ぺこりと下げた頭には、以前買った猫耳が揺れている。君にはさっぱり意味がわからなかったが、追いつけずわけにも行かない。ひとまず部屋に通した。

君に貸し出されているアセンシブ社の仮眠室アセンシブ社にいくつもあるうちの一つは、ほぼ寝るためだけの部屋ゆえベッド以外にとにかく物が無い。自然、君はベッドに腰掛けた。エニイにも座るように促したが、座るでもなく、じっと君を見つめている。挨拶た以外には何も話さないのが不気味だ。

……ウイズが出かけていて三角が不足しているエニイと三角は切っても切れない関係にある。のが原因だろうか？ 三角不足で荒れているのか、と君は尋ねた。

「ふしゃー！」
違うらしい。

ウイズはウイジエツタとお喋りをするらしく不在、君は自室で待機を命じられていた中での訪問。ちよつと様子がおかしいが、いつものように遊びに来たのだろうと推測し、今日は何をしようかと君はエニイに声をかけた。

「……にゃあ」

どことなく不満げに聞こえる鳴き声？ が返ってきたが、あいにく君は猫語を訳することはできない。ウイズについてはあちらが人間の言葉で話しているからノーカンだ。

何を求められているのかまったくわからず、ただただ困惑している君にしびれを切らしたのか、エニイは実力行使に打って出た。

「にゃー!」

ごろん、と君に飛び込んできたエニイは、そのまま太ももに頭を乗せ、満足げな笑顔を浮かべた。要するにエニイをベッドで膝枕をしているわけだが、これが目的だったのだろうか。

暫くの間、太ももに顔を埋めたり、腹に顔を擦り付けたりと膝枕を満喫していたエニイだったが、やがてされるがままの君に不満げな視線を向けてきた。

「猫が甘えてきたら、撫でたりするんじゃないの……?」

突然普通にしゃべり始めたことに驚愕しながらも、君はようやく事情を察した。ヒントなんてなくとも、最初から答えは示されていたのだ。

……そう、エニイは猫になりたがっているのだろう。

以前からウイズに耳だけでなく関心を抱いていたエニイは、とうとう自らが猫に近づくことで三角の自給自足を試みるに至ったに違いない。

つまり、君が今すべきは、エニイを猫可愛がりすることだ。ようやくの納得を経て、君は目の前のクリーム色をした頭に手を伸ばした。

「魔法使いがどうしてるかって? まあ、今頃は部屋でエニイを撫で回してるんじゃない

い？」

「にやつ!? どういうことにや、ウイジエツタ! 詳しく説明するにや!」

下準備は終わったから正直な予想を話したら、思った以上の面白い反応が返ってきた。目の前にいるウイズを足止めするのが、今日のあたしの役割だ。まあ、部屋からは出られないだろうから、そろそろネタばらししてもいいかなってことで。

「詳しくも何も、あたしがウイズを引き留める、その間にエニイが魔法使いの猫になる。単純かつ有効、とつてもスマートな作戦じゃない?」

「ちよつと待つにや! エニイが? 猫になる? さつき撫で回すつて? ……にや……」

何を想像したかは聞かないが、あわあわと視線を泳がせ、駆けつけようと走り出すウイズ。

まずい。何をするかは伏せておくつもりだったのに。……とはいったものの、この混乱ぶりなら大丈夫かな。

駆け出した理由は弟子想いなのかそれ以外なのかに大した興味はないが、エニイの成長の邪魔をさせるわけにもいかない。こつそりとディライブデータを実体化すること。家具から食品まで、生命以外ならデータを基になんでも作り出せる。しておいたそれを、横目で確認し……。

あたしは、手元の紐を引つ張った。

「ふぎや!? にやにや、暗いにな!?」

「猫かごって言うらしいわね、それ。まさか役に立つ日が来るとは思つてなかつたけど」
たまたま発掘したブログどれだけ甘く見ても一世紀以上は昔のもの。から再現した
はいいものの、インテリア以外の用途がなかつたこのかご。人間以外の生物がいなく
なつて久しいこんな世界で、猫を捕まえるためだけの装置が役に立つ機会が巡つてきた
――。

「――最っ高ね!」

「私は最低の気分にあ! 早く出すにあ!」

「はいはい。ごめんごめん」

まったく、マニアつてのは皆こうにあ……と地味に傷つく言葉で突き刺してくるウイズに謝つて、かごの前面を上げた。ぶつくすと文句を言いながら出てきたウイズに、もうちよいお話ししましよ、と持ちかける。

「まあ、いいにや。よく考えたら、あの二人で何か起きるほうがありえないにや」

思惑通りに冷静さを取り戻したウイズ。猫になるとうっかり漏らしてしまつたところを問い詰められたらちよつとまずかつたけど、こうなればこつちのものだ。

「それで？ 異界108ほどあるという異世界。自分が住む以外の異界に触れることはかなり稀。の話でもすればいいのにかにや？ うちの弟子に色々聞いてるらしいけど」
「そうねー」

魔法使いの話も参考になるが、別の視点を入れることで更にクオリティが上がる。『サモナーズアリーナ』は今のところで進捗率6割くらい、まだ煮詰められるはず。

「まずはこの若菜つて娘の話、魔法使い以外からももうちよつと詳しく聞いておきたいんだけど」

「若菜かにや？ あの子はカードゲームが強くて姉がエニグマなだけの普通の子つてのが私の見立てにや」

ふむふむ、と頷いて仮想画面SF映画にありがちな浮いている画面。投影機が必要となるが、タブレットなどを持つよりも便利。打鍵感が足りないのが不満点。にメモをとる。面白いエピソードは魔法使いから、大まかな人間性はウイズから聞くとバランスが取れた再現ができるのかもしれない。

これは作業が捗りそう、と喜んだあたしに、ウイズから追加の情報が投げつけられた。「というか姉がにやー。世界のために戦ったつてのうちの弟子を同類認定してにやー。距離が近いんだにや。世話焼きだつてもあるけど、それだけじゃないと私は睨んでるにや。がちじゃないときはダラダラ派だつて聞いたにや。私達がいるときだ

け取り繕ってるにや、あれは」

聞きたいことは色々増えてしまったけど、つつくのは面倒そうな話題だ。次の話に逃げる。

「んじゃ次は……」

と、そこで。頭に、そつと触れられたような感覚が走った。勢いよく振り向いても、誰もいない。

「どうかしたにや?」

「いや、なんか……。まあ、気のせいよね?」

ウイズに妙なものを見る視線を向けられたけど、気を取り直して話を再開。

「えつと、次はアマ……っ!」

ゆつくりと、撫でられている。これでわかった。この感触は本物だ。恐らくエニイのレゾネイターによる共鳴で、撫でられているエニイの感覚が流れ込んできているのだろう。となると計画は順調に進んでいるらしい。

それはともかくとして。

触れられるのは苦手なんですけど! インドア派に身体接触はNG! なんか髪が乱れる(乱れない)し、ぞわぞわするし……。

……暖かいし、落ち着くし、心地よくて幸せな……。

「だーっ！」

「にやつ!？」

エニイの思考に割って入られてる!

何とかして共鳴を防ごうと試みるが、効果はない。ウイズが怯えているが、弁解は後つてことで、ごめん。というかウイズは共鳴してないのね。

必死に抗つてはみても、共鳴でエニイの幸福感も一緒に伝わってくるせいで、撫でられることへの抵抗感が薄れていく。

……なんか撫でるのうまくない? 気のせい?

「インドア派の誇りが……」

「いったいどうしたにや……」

もはや抵抗する気力を失い、与えられるがままに感触を受け止めた。

エニイとの共鳴を遮るものがなくなつて、やがて同一になつていく――。

優しく頭を撫でられ、頬を撫でられ、顎を擦られ。それに目を細めて、緩みきつた笑顔で見上げると、穏やかな微笑みが視界に入った。あなたも、楽しんでくれてるんだよね、きつと。そうだったら、いいな。

頭をぐりぐりと押しつけると、くすぐりたいと身をよじられ、ちよつと強めの撫で方

に変わる。このくらいがちょうどいい……かな。

なんだかとても眠くなってきた。猫は寝子、よく眠るのが語源だったりするらしい。……私は^{あたし}あなたの猫だから、ここで寝ちやつてもしょうがないよね？

『「おやすみ」』

安心からか、脱力しきった声が聞^{口から出て}こえて、私は意識を手放した。

「ウイジエッタ、起きるにゃー！」

耳元で叫ばれ、流石に目が覚めた。せっかく心地よく眠っていたのに、と文句を言ううとして……思い出してしまった。

口から叫びが漏れそうなのを、机に突つ伏して抑えつける。あれはエニイの思考であるのと同時に、同一化したあたしの思考でもある。……共鳴は、重なり合う思考がないと起こらない。

それが意味するところは……考えないでおこう。うん。

「熱心なのはいいけど、あんなふうに気絶するまで作業してちや駄目にゃ。休眠はしつかり取るにゃ」

幸いにしてウイズは作業の疲れで寝落ちたと勘違いしているらしい。あははー、と乾いた笑顔で誤魔化して、忠告どおり眠るから、とウイズを解放した。

時計もはや絶滅してしまつたねじ巻き式の時計だ。設計図をサルベージできたから、材料はディライブして作つた。たまにズレるのが愛おしい。を見ると、30分ほど寝てしまつていたらしい。どうにも顔が火照つているが、電源が点けつぱなしだった端末ウイジェットタの普段使いのもの。仕事用ゆえ趣味は無視して性能を突き詰めており、冷却性能は非常に高い。のせいだろう。きつと。

君は、膝で眠つてしまつたエニイに途方に暮れていた。膝からおろして起こしてしまふのは忍びないが、そのままでは何もできないのだ。

名前を呼んだり幸せそうな寝顔をつついて、極力優しく起こそうと試みる。

「えへへ……」

……駄目だった。へにやりとした笑みを浮かべるものの、起きる様子はない。もうそろそろ昼食を食いたいんだけどな、と君は悩んだ。

と、そこで。扉をノックされ、クランの声が聞こえた。

『おーい、魔法使い！ 入つていいか？』

鍵とかはかかつてないから好きに入つて、と君が答えると、それじゃ入るぞ、と何や

ら皿を持ったクランがやってきた。

「まだお昼済ませてないよな？」

質問に君が頷くと、クランはほっと息をついて、皿に盛られた何かを手渡してきた。

「はい、おにぎり。一緒に食べようって思ってた。いっぱい持ってきたんだ」

手渡されたおにぎりはちよつと歪な三角で、ほんのり温かい。ついでに白くもない。この異界での食事というのは既製品をデイルाइブしたものがほとんどで、そうしたものは均一な形になるはず。もしかして、と君は尋ねた。

「うっ……よく気づくな。うん、私が作ったんだよ。ミステイハイドがやってみろって言うからさ。嫌だったら、適当に別のものをデイルाइブしてくれても……」

そんなことはしないと、クランの不安を打ち消すように君は、おにぎりに齧りついた。雑穀米特有の複雑な風味は、君にとっては懐かしいものだ。いつも金欠気味の気分屋前話参照。では毎食雑穀米だったし、出会ってすぐの弱小神だった頃のミコト異界の和歌を司る神。の社でもそれは同じだった。

白米でないのはミステイハイドの忍者ゆえのこだわりらしい。栄養豊富だとか何とか。

「ど、どうだ……？」

……不安げに見つめてくるクランに美味しいと伝えるために、笑ってサムズアップす

ると克蘭は、はにかむような笑顔を浮かべた。

「…………お腹空いた」

匂いにつられたのか、エニイも起きてきた。いや、もしかして狸寝入りしていたのでは？ ……君は疑惑の眼差しを向けるが、エニイは素知らぬ顔でおにぎりを頬張った。

「これはね……………いい三角」

もぐもぐと食べ進めるエニイを、克蘭は嬉しそうに眺めている。実に和やかな空間だ。

…………いや、おかしい。そういえばなぜ克蘭は、膝で眠るエニイを見ても何も言っていないのか。君は今更ながら気づいた。

「いや、お前の猫なんだから別に不思議じゃないし。…………あれ、もしかしてエニイから何も聞いてないのか？ いやでも、撫でてたよな？」

猫になりたいと言っているのは聞いたけど、と君は答えた。

「肝心のところが何も伝わっていないじゃん、エニイ？」

「喋るのはね、まだ初心者言いたいことは共鳴すれば事足りてきたため。だから」

「理由になってないぞ」

視線を逸らして誤魔化すエニイは、何やら君に伝えたいことがあったらしい。

それは後で聞くとして、食事を終えた君は克蘭に感謝を述べた。わざわざ持つてきてくれてありがとう。中身も様々で、飽きずに美味しく食べることができた、と。

「礼ならミスティハイドに言えつて。食材の準備とかは全部やつてくれたから。私は最後に握つて持つてきただけだ」

ミスティハイドにも後でお礼は言うけど、今は克蘭に言つてるんだから、と礼は素直に受け取るべきと君は論じた。

「うう……。わかつたわかつた、わかつたから！ どういたしまして！」

「愛情たっぷり、こもつてた。……美味しいのはね、それが理由、かな」

「そんなにこめてない！ ……つてか、話を逸らそうとしてるだろ、エニィ！」

「……………それじゃ、またね」

ひらひらと手を振つて、部屋から脱出しようとするエニィ。その背中に、頬を引き攣らせた克蘭が言葉を投げかける。……なぜか右手に猫耳をデリライブして。

「はーん、どっか行くなら行けばいいんじゃないか。別に、私がやつても同じことだし……………な！」

「あ……。それは、ま、待つて！」

事情がわからず傍観していた君に、突然猫耳をつけた克蘭が飛びついてくる。不意打ちを受け止めきれずベッドに倒れ込んだ君に覆い被さつて、克蘭は囁いた。

「なあ、私を——お前のペットにしてくれ」

……………ちよつと待つてほしい、君はそう思った。

さて、君は上に乗っているクランを押し退けて身体を起こし、「あつ、ちよつ！」ひとまず質問することにした。場合によってはグリットか師匠にお説教をお願いするかもしれない。

まず……………ペット？

もしかしたら言葉の定義が違う可能性もある。ここは異界なのだ。ということでは確認から始めることにした

「ペット。犬とか猫とかの動物の家族のことだろ？ え、違うのか？」

君の思うペットと差はほとんどなかった。では……………ペットにしてくれというのが何かしらの慣用句なのだろうか？

「そのままの意味だけど」

???

ペットになりたい……………ということだろうか。君には理解できない思考だ。魔界でのトラウマ鉄仮面に足かせを着けられた状態で鉄格子で監禁されたこと。は、重い。

なぜペットになりたいのか、君は素直に尋ねた。真つ当な理由でなかったらどうしよ

うか悩むが、聞かないことには始まらない。

「エニイ、私が言っちゃうぞ？ いいのか？」

「……ちゃんと私が、言う。うん、聞いてね」

エニイが言えなかったことがこれだったのだろうか。確かに、ペットにしてほしいというのはいづらいな……と君はひとりで納得した。

「おウイズは……あなたと仲がいい、よね」

君は頷いた。師弟仲はかなりいい方だと自負している。それがどう繋がるのか。

「おウイズには、遠慮とか、全然してないから。だったら……。だったら、私があなただのペットになればね、遠ざかろうとなんて、しなくなるかなって……」

ちよつと待って、と。君は話を遮った。

まず、ウイズはペットじゃなくて師匠だ。

「うん、知ってる。でも、師匠にしてはね、遠慮がないと思う」

それは君では否定できない。

それなりに長い旅を続けてきたため、尊敬できない面も見えてきてしまうものだ。食意地が張つてるところとか。

なんて考え事をしていた隙に、エニイが歩み寄ってくる。座るならどこでもいいはずなのに、君の方へ。

「それにね。師匠であの距離なら……」

ふわりと、抱きつくように君の膝に座ったエニイが、至近距離から見上げてきた。視線が、透き通った瞳に吸い寄せられる。

「^家ペットなら、もつと近くでも、いいってこと。……だよな？」

ちよつと押されたらキスしてしまいそうな距離。クランが息を呑む音が聞こえたが、君の視線は変わらず動かさない。

人間をペットには普通しないよ。苦し紛れに、君は反論を試みた。

「飼っていた犬が人間になって恩返しに来るとか、昔はよくあつたらしいぞ。そういう資料がいっぱいあつたし」

「一番古いのはね、鶴……なんだって自らの羽根で機織りする、恩返しの話。駄目だと言われたことはしない、という教訓話によく使われる。ミステイハイドが言つてた」

エニイが喋ると、吐息があたる。潰された反論に何か言おうとして、しかし君の現在の乱れた思考では、何も浮かばない。

この話を続けるのは無理だということ、君は何とか次の話題に逃げる。

遠ざかろうとしている……だったか。それは一体……？

君にとつては身に覚えがないことだ。だというのに、それを口に出した瞬間、エニイはがつつちりと君の脇腹をロックする。

話題転換ついでにエニイを引き剥がそうという君の作戦は、計画倒れに終わった。無理やり引き剥がしたら、エニイが背中から床に落ちてしまう。

更に、ただでさえ心臓に悪い近距離が、また近づいてしまった。もう目の前の顔しか見えない。仮にウイズやらグリットやらが部屋に入ってきたら言い逃れはできないよ
うな、そんな距離だ。

ちよつと離れない？ 君は提案するが、あつさりと顔を横に振られてしまう。別段ぶんぶんと振ったわけでもないその動きでさえ、髪が当たるのではないかと思うほどの距離なのだが。

「あなたはね、異界の人。それはわかってる」

そうだね、と答えることもできない。真剣で、必死な目に、動けない。

「いつかは、元の世界に帰る。それもね、わかってる」

当たり前のことだが、改めて口に出されると、それを君は寂しく思った。

そう、いつかはお別れしなきゃいけないし、また会えるかなんてわからない。

——だから。

自分がいなくても、笑っていてほしい
「あなたも一緒に、笑っていてほしい」

ちゃんと共鳴した。そうだね。あなた君が私を想うように、私もエニイあなたを想って

いるから。

でも、私は。あなたが思うより成長したよ……たぶん。クラックハンド隊のみんながいて、シエルのみんながいて。

だから、きつともう。

「あなたがいなくても笑っていられるよ」
だから。だったら。

やはり君は、寂しいと思った。

そんな役割とか、必要だとか考えないで。仲間でも友達でも、飼い主でもいいから、側にいて。

共鳴が切れた。がっちり君をホールドしていたはずのエニイの手は、いつの間にか弱々しく君のローブの袖を掴んでいる。

「違う、違うよ、私は……。そう言いたいんじゃない……。何で？ うまく、共鳴できない……」

今にも泣いてしまいそうなエニイを、君はそっと抱きしめた。大丈夫。ちゃんと伝わってるから。震えが強くなる背中をゆっくり撫でて、君はクランに声をかけた。

……………？

「……自分たちは仲間かって？ 何言ってるんだよ、当たり前だろー！」

.....。

「友達かってお前……。友達じゃないって言ったら流石に怒るぞ。私でもさ」

.....？

「明日？ ああ、勿論。思いつ切り色んなところに連れ回すから、覚悟しとけよな！

.....一緒にだぞ？ 絶対だぞ？」

それは.....楽しみだ。君が呟いた言葉で、エニイは顔を上げた。やっぱり笑っていてほしいな、と君は思った。

「そうだな、だから.....。うん。友達かどうか不安なら、やっぱり今日からペットでいいんだよ。友達より近い関係だろ、家族なんだし。なあ、エニイ」

「にゃ」

まだペットになるのを諦めさせたわけではなかった。それによろやく気づいた君は、止める間もなく再び克蘭に飛びつかれた。手を離れたエニイも、同様に抱きついてくる。

後ろに克蘭、前からエニイ。二人にべつたりとくつつかれ、君は苦笑いした。説得は、別の誰かに頼もう。一緒に怒られるのも友達っぽいかな、とポジティブ思考で諦めて。

……あたしは、アセンシブ社の廊下を歩いてきた。二人——エニイと克蘭が撫で回されている感覚を、共鳴で叩きつけられ続けて、1時間ほど前に解放されたところ。

二人分の感覚の共鳴というのは強烈だった。多幸感に包まれ、温まりが気持ちよくて、自分が撫でられたらどうなっちゃうんだろうとか……。情報の強度が増すというのは、それだけ詳細に感覚が伝わってくるということだから。

「いや、違うから。インドア派に撫でられ願望とかないから。作業の邪魔だって注意しに行くだけ」

なーんて、口では否定しているけど、芽生えた欲望は抑えられないのがマニアの性。結局、今だって会いに動いてるわけだし。

目的地についてしまった。ここから先はバックアップから復元なんてない一本勝負。深呼吸して、扉を開けた。

「ハロー、魔法使い。今いい？ ……って、お取り込み中ね」

エニイと克蘭が、魔法使いにもたれるようにして眠っていた。エニイは午前も昼寝していた気がするけど、共鳴を短いスパンで何度も使ったら疲れちゃうか。

心持ち小声で話しかけると、困ったような笑顔が返ってきた。そして、ベッドにちゃんと寝かせてあげたいから手伝ってくれないか、と提案される。

これはチャンスだ。

「本来インドア派に肉体労働させようなんて絶対拒否だけど……。後であたしの要件に付き合ってくれるなら各かではないって感じで。どう？」

文句なしって顔になったので、お手伝いしてあげましょう。使えるガジェットも特にないから、素直にエニイを逆側にゆくり倒す。そしてそのまま転がしていけば一丁上がり。

クランは抱き上げられて運ばれていた。そのままエニイの横にそつと寝かせられている。二人とも幸せいっぱい、といった感じの寝顔で、多分うまくやったんだろうなー、と思う。

ありがとう、とお礼を言われたけど、交換条件を確認してからの方がいいんじゃないの？ ここじゃないとここで騙されたりしてない？ まあ今回は、別にそれでもいいけど。

「それじゃ、交換条件ってことで……。あつちに移動しましよつか」

指差したのは、隣の仮眠室。誰も使っていないのは来たときに確認していたので、社

員証をかざせばスムーズに入室できた。

隣に座るように促し、猫耳をディライブ……しようにも、データがないことに今更気づいた。

「えっ？ あっ？ あれ？ あれ？ あれ!？」

エニイもクランも当然のように持ってたから確認し忘れたけど、普通は猫耳なんざ持っていないって！ 買ってなければそりや持ってないわ！ え、どうしよう。二人が作った猫ムーブメントに乗ることができない！

オペレーターにあるまじき失念に、焦りと動揺で、今から注文しようと端末をいじる手が縛れる縛れる。

そんなあたしを見かねたのか、ぼふりと頭に手を置かれた。嫌悪感は………全くな
い。

「撫でてほしいなんて、言っていないんだけど？」

……何となく悔しいから、そう憎まれ口を叩いてみると、あっさりと手は下ろされてしまった。

手が離れた瞬間、あっ、とか何とか、今日び恋愛ゲーでも聞かないような声が漏れそうになって、慌てて口を塞ぐ。なんか、これも乙女ゲー感ある動作じゃない？

いや今はそんなこと気にしてる場合じゃなくって。

「止める、とも言っていないわよ?」

……………ツンデレか何かかな?

さっきのと合わせて、ちよつと自分の口から出たとは思えない言葉に内心で悶絶する。

それでも、こわごわとした撫でが再開されると、そんなことはどうでも良くなつてしまった。共鳴で押し付けられた心地よさを超えてくるのは予想外にもほどがあるんじゃない?

肩に頭を預けて、全体重をかけていく。猫っぽく膝で撫でられるのもいいが、こういうのも中々どうして悪くないかも。

すっかり慣れた手付きで撫でてくるこいつと、やつと緊張が抜けてもたれられるようになったあたし。ふにやふにやと、全身が弛緩していく気がする。

身体接触が嫌だったはずの私がこうして受け入れられるのは、なぜか。撫でられる感触と幸福感が共鳴で同時に与えられることで、その二つが紐付けられたってことだと思う。

でも多分、それだけじゃ共鳴の心地よさを超えられない。安心感とか信頼感とか、元々持っていた好印象がそういうのと合わさることで、上乘せされているんだ。

——つまり、元々好きだったのでは?

そこまで思考が行き着くと、あたしは跳ね起きた。いや、流石にそれは違うから。違うって！

……いや、それを必死に否定しても今は好きだったことに変わりないのでは？ 冷静な部分のあたしが囁いた。喧しいわ。

「こんくらいでお終いつてことでじゃあまたね」

一息で言い終えると、逃げるように駆け出した。ぽかんとしたまま残されるのは不憫かもだけど、役得にそんなくらいの代償はあっていいんじゃない？

——それからと言うものの、君の部屋にはこれまで以上にエニイやクランが入り浸るようになり、ウイジェットタは、こっそり連絡してきて、君の他に誰もいない時間を狙って度々訪ねてくるようになった。

ペット云々の話は、いつの間にか無くなった。君が、ちゃんと離れないようにと心がけた結果だろうか。ただ、度々撫でるのを要求されるようにはなった。

君の心境も確かに変わっていて。こんな平和が続いてほしいと、心の片隅で願うようになっていた。いつかは帰るかもしれないけど、今を、少しでも長く、と。

——そんな平和な時も、それから一週間ほど経ったある日、突然に終わった。他ならぬ、アセンシブ社の手によって。